



多摩六都科学館 事業評価報告書

平成29年度～令和元年度（3カ年）の中期計画における
令和元年度（2019年度）実績報告ならびに事業目標の達成度などに関する評価報告

本報告書の構成

多摩六都科学館における事業評価の基本的な考え方	1頁
多摩六都科学館事業評価票	
1. 指定管理者による自己評価ならびに外部評価 —5つの事業目標ごとの評価— ①～⑤	2～16頁
2. 多摩六都科学館組合による自己評価ならびに外部評価	17～23頁
3. 総評 使命ならびに活動理念の評価	24～26頁
参考資料	27～31頁

令和2年（2020年）7月

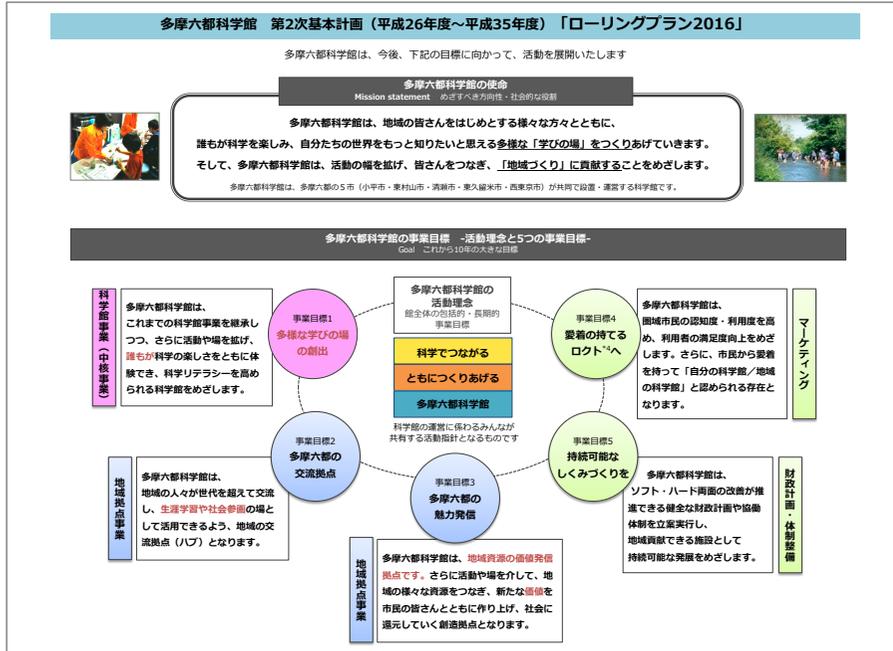
多摩六都科学館組合

指定管理者：株式会社 乃村工藝社

1. 多摩六都科学館における事業評価の意義

多摩六都科学館は、平成25年度（2013年度）に策定した第2次基本計画（平成26年度～令和5年度／2014年度～2023年度）（2017年度からは第2次基本計画の見直し版「ローリングプラン2016」）に基づき、事業評価を実施する。事業評価を導入することによって、基本計画に掲げた使命ならびに事業目標の達成度や事業の取組姿勢・進捗状況が検証可能な中長期的目標管理システムの構築をめざす。

評価結果を事業の修正、翌年度の予算編成や事業計画に反映させ、計画（Plan）－実行（Do）－評価検証（Check）－改善（Action）のPDCAマネジメントサイクルを機能させ、継続的な業務改善・サービスの向上が図られるよう努める。また、評価結果を公表することにより、構成市ならびに圏域市民に対して、公の施設としての社会的説明責任を果たし、公的事業の透明性を図るものとする。



2. 事業評価の進め方

平成26年度は試行として進め、業績指標・検証方法などの検討を行い、本格導入は平成27年度からとする。多摩六都科学館の事業評価は、中期で事業方針を定め、その進捗状況や目標の達成度を経年変化で検証する。第1期は平成26年度～平成28年度、第2期は平成29年度～令和元年度の3カ年とする。各年度の事業評価は、多摩六都科学館組合と指定管理者が自己評価（1次評価）を行い、さらに事業評価委員会（構成員は科学教育や博物館運営に関わる有識者と圏域の市民）による外部評価（2次評価）を行い、その結果を事業評価報告書としてまとめ、事業報告書とともに構成五市に報告し、情報公開という流れで実施する。

第2次基本計画の期間（H26～R5/2014～2023）										
年度	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
中期	3カ年			3カ年			3カ年			

3. 事業評価の概要

評価実施者	評価の種別	概要（評価対象ならびに進め方など）
指定管理者	自己評価 1次評価	第2次基本計画に定めた「使命」ならびに「活動理念」「5つの事業目標」に沿って、指定管理者が定めた「事業計画の基本方針」（中期3カ年の事業目標）の進捗状況・妥当性・達成度・有効性について、年度毎に自己評価を行う。指定管理期間終了年度には中期における取り組みについて総評を行う。各年度の事業結果の詳細は、「事業報告書」をとりまとめ、報告・公表する。
多摩六都科学館組合	自己評価 1次評価	第2次基本計画に定めた「使命」ならびに「活動理念」「5つの事業目標」が達成できるよう、計画された「重点戦略」および「中期で重点的に取り組む戦略」のうち、組合が推進すべき取り組みについて、進捗状況・妥当性・達成度・有効性について、年度毎に評価を行う。指定管理期間終了年度には中期における取り組みについて総評を行う。
事業評価委員会	外部評価 2次評価	第2次基本計画に定めた「使命」ならびに「活動理念」「5つの事業目標」に向かって科学館の管理運営を推進できたかを、年度毎に外部評価を行う。指定管理期間終了年度には中期における取組について総評を行う。

4. 業績指標の検証方法

多摩六都科学館では、下記方法で業績の検証を行う。数字だけでは実態を把握できない取組姿勢や進捗状況なども定性的に自己評価し、中長期的な目標の達成度を検証できるように試みていく計画である。

類型	検証時期	検証方法	ベンチマークス	調査実施者
A	毎年	結果データを定量的に検証	経年変化を検証	指定管理者
B	毎年・中期	取組内容を定性的に検証	経年変化を検証	指定管理者・組合
C	毎年	利用者を対象にアンケートを実施し、定量的なデータを測定し、検証	経年変化を検証	指定管理者
D	毎年	市民モニターなどを対象にインタビュー調査を実施し、定性的に検証	経年変化を検証	組合（指定管理者協力） H27年度から実施
E	中期の区切りで	圏域市民を対象にアンケートを実施し、定量的なデータを測定し、検証	平成28年度のデータと比較し、変化を検証	組合（指定管理者協力）
F	中期の区切りで	事業評価委員会・市民モニターが取組内容や成果を定性的に検証	平成25年度、28年度の状況と比較し、変化を検証	組合（指定管理者協力）
G	中期の区切りで	設定ターゲットに対して内容や成果を定性的に検証（FGI）	R1に実施、効果を検証	組合（指定管理者協力）
H	中期の区切りで	設定ターゲットに対してアンケートを実施し、定量的に検証	R1に実施、効果を検証	組合（指定管理者協力）

5. 段階評価の基準

自己評価の目標の達成度ならびに外部評価の評定は、段階評価で実施する。

評価	評価内容・基準
A++	優良：目標を超える成果を挙げている。内容が特に優れている。
A+	良好：目標に対し良好な成果を挙げている。内容に優れた点が見られる。
A	適正：計画に則して目標を達成している。内容が適正である。
B	改善：目標が達成できていない点がある。もしくは内容の改善が必要である。
C	見直し：目標がほとんど達成できていない。抜本的な改善が必要である。

1. 事業目標ならびに事業方針

注：事業目標・取組方針内の赤字は、「ローリングプラン2016」で修正された箇所。

第2次基本計画			指定管理者・事業計画
事業領域	事業目標-1	取組方針	H29年度～H31年度（中期）事業の基本方針
事業計画 科学館事業 (中核事業)	多様な学びの場の創出 多摩六都科学館は、これまでの科学館事業を継承しつつ、さらに活動や場を拡げ、誰もが科学の楽しさをともに体験でき、科学リテラシーを高められる科学館をめざします。	多摩六都科学館の中核事業です。「科学を楽しみながら学べる科学館」「子どもたちの科学する心を育む科学館」像はこれまで通り大切にしつつ、幅広い年齢層も利用できる施設へと徐々に領域を拡げます。多くの方々が科学の楽しさに触れ、新たな価値を発見できる科学館像の実現をめざします。	科学の楽しさを実感できる学びの場と機会を創造する。 多摩六都科学館の新10年計画（第2次基本計画）の使命として掲げられた『多様な「学びの場」の創出』と、科学館事業目標である圏域市民の「科学リテラシーを高める」を達成させるためには、2020年からの学習指導要領にもある『主体的・対話的で深い学び』を実現する事に重なる。これは「実感を伴う理解の場と機会を提供する」対話的・体験的な事業の実現でのみ可能と考えられます。このため、標本・装置の充実、専門性とエンジョイメントの両立、参加体験でのコミュニケーション(解説計画)のさらなる充実をめざします。 中核事業の活動のテーマでもある「DO！サイエンス」とは、「実感を伴った理解を図る学習活動」の場と機会を提供し、その中で観察・実験・工作といった学校では体験しにくい活動を重視します。

2. 中期の重点戦略ならびに業績指標

3. 評価結果・指標の実績結果

赤字：新規の指標あるいは「ローリングプラン2016」で改訂された箇所 セル黄色：市民モニター関連 青字：実状に沿うよう指標ならびに測定方法等を見直したもの 評価結果欄の斜め線：調査未あるいは定性評価として実施

重点戦略	事業概要	業績指標	定量	検証方法	中期目標（目標値）	前中期			今中期			中期3カ年	H28調査
						H26	H27	H28	H29	H30	R1		
専門性とエンジョイメントを基本とし見通しを持った体験による実感を伴った理解とコミュニケーションを重視した、探求的で主体的な学びとなる事業を行います。	II-1 科学館事業全体	●「コミュニケーション重視の体験が充実」と答えた人の割合	*	C	今後、測定予定								
		●「科学の楽しさを実感した」と答えた人の割合	*	C	"								
		●科学への興味喚起度（利用者調査・定量的）	*	C					89.3%	89.3%	88.7%		
		●科学への興味喚起度（市民モニターが検証・定性的）		D				A+	A+	A+	A+	A+	
		●幅広い年齢層からの支持（削除）	*	C									
		●常設展示 満足度（館内アンケート）	*	C	80%以上が満足	78.1%	84.5%	79.8%	74.8%	78.6%	76.1%		
		●企画展示 満足度（①館内アンケート、②会場アンケート）	*	C	80%以上が満足	①72.0%	74.0%	81.5%	①74.8%	①71.4%	①82.5%		
		●今中期より②会場アンケートは満足度ではなく、自由回答から質的評価を実施				②85.0%	89.0%	83.7%	実施	実施	実施		
		●①プラネタリウム・②大型映像 満足度（館内アンケート）	*	C	80%以上が満足	①92.5%	90.4%	89.8%	①90.1%	①89.6%	①85.7%		
		●参加体験型学習プログラム 満足度（各プログラムで実施しているアンケート）	*	C	80%以上が満足	99.0%	99.0%	99.0%	99.9%	実施	実施		
		●H30より満足度ではなく、自由回答から質的評価を実施											
		●学校団体（教員アンケート） 学習投影での児童満足度	*	A	80%以上が満足				81.0%	93.0%	94.0%		
		●学校団体（教員アンケート） 展示室見学が役に立ったと答えた割合	*	A	80%以上が満足				85.0%	97.0%	84.0%		
		●学校団体（教員アンケート） 学習プログラムでの学習効果が高いと回答した割合	*	A	80%以上が満足				72.0%	83.0%	78.0%		
		●「主体的・対話的で深い学び」に対応するプログラムの開発や実施に向けての取組		B					実施	実施	実施		
ソーシャル・インクルージョンに基づき、誰もが分け隔てなく参加して楽しめるよう、子どもだけでなく、高齢者も障がいのある方も、すべての人々がともに楽しみながら学べる場と機会の創造に努めます。		●ソーシャル・インクルージョンに基づく活動への取組		B					実施	実施	実施		
		●ソーシャル・インクルージョンに基づく活動への取組		D					B	A	A		
		●リピーターの比率の維持	*	C	50%～60%を維持				58.4%	65.0%	65.5%		
		●ファミリー層の新規利用者の増員をめざした取組		B	検討/実施				実施	実施	実施		
		●年齢別プログラムや事業の取組数（削除）	*	A									
展示や教育普及活動がさらに充実するよう、科学館事業の基盤となる収集・保存・調査研究活動の強化を図ります。特に東京の自然史（地域資源）を重要テーマと位置づけます。	II-1-1	●調査研究活動		B	検討/実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施		
		●標本資料や装置の充実（研究成果の市民への還元）（削除）		B	検討/実施								
		●多様なジャンルとのコラボレーション企画開発		B	検討/実施				実施	実施	実施		
多様なテーマ（健康・食・芸術など）を科学的なアプローチで探求し、科学に興味のない方も来てみたいと思わせる事業展開を図ります。様々な利用者層に合わせたプログラムで、科学への興味を引き出す場をつくりだします。	<組合>	●地域連携イベントなどの実施		B	検討/実施				実施	実施	実施		
		●行政への働きかけや体制整備に向けての取組（削除）		B	検討/実施								
館内だけでなく、地域全体にも活動フィールドを拡げ、多くの方々科学の楽しさを体験できるよう、アウトリーチ活動を推進します。特に来館しづらい環境にある学校に対してアウトリーチ活動を行っています。	II-1-5 II-2全体	●圏域五市小学校へのアウトリーチ活動	*	A	各市1校ずつ5校実施	10校	11校	12校	10校	9校	9校		
		●圏域五市中学校へのアウトリーチ活動	*	A	5市で1校は実施	3校	2校	1校	1校	1校	1校		
		●その他の機関などへのアウトリーチ活動		B	検討/実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施	
		●ボランティアによるアウトリーチ活動		B	検討/実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施	
		●業務基準書改訂に向けた検証（削除）		B	検討/実施								
市民や機関と連携を図り、圏域内に科学教育の場が広がっていくことも視野に入れて事業展開を図ります。	組合との協働	●圏域内でのアウトリーチ活動の推進		B	検討/実施				実施	実施	実施		

赤字：新規の指標あるいは「ローリングプラン2016」で改訂された箇所 セル黄色：市民モニター関連

↓別表参照

重点戦略	事業概要	業績指標	定量	検証方法	中期目標（目標値）	前中期			今中期			中期3カ年 実測値	H28調査 参考値
						H26	H27	H28	H29	H30	R1		
	中期的な指標 （主は組合・指定管理者協力）	■ 「誰もが科学を楽しめる科学館」としての評価（定量）（削除）	*	E									5.49
		■ 圏域市民の科学リテラシーの向上（科学への興味喚起度）（定量）											4.99
		■ 指標：生活の中で役立つ科学の知識が身につく、世界の課題を科学的な観点から考えることができる科学館	*	E									
		■ 圏域市民の科学リテラシーの向上（科学への興味喚起度）		F								A	A+
		■ 科学の担い手の育成（定性）		F								A+	A+
		■ 継続的なユーザーの評価		G									
		■ 「科学館での体験を通して、考え方や生き方に変化が生まれたか」 そのような事業を行っているか（定性）		F								A+	A+
ひとりで展示を見るだけではなく、その場に参加した人たちで、ともにつくりあげていくプログラムへと転換を図ります。	II-1全体	参加体験型の学習活動の拡充（削除）		B	検討／実施								

平均値：4.94

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
H29	<p>東大農場・演習林を守る会やむさしの自然史研究会と東大農場・演習林や館庭の昆虫調査を実施。今後、昆虫調査結果を整理し、展示室4「しげんの部屋」に展開する。</p> <p>夏の企画展では初めて数学をテーマとし、パズルを切り口として楽しみながら数学に触れる内容で開催。昨年の昆虫展には僅かに及ばなかったが期待通りの集客結果を得た。大人向け平日講座として『大人のための地球科学入門』をテスト的に2回開催、当初は参加者が来るか懸念されたが、2回共に満席となる参加者となった。</p> <p>大人向けプログラムはサイエンスレクチャーやサイエンスカフェが中心であったが、今後このような講座の開催も進めていく。</p> <p>サイエンスカフェでは、カプリ数物連携宇宙研究機構（Kavli IPMU）との協力で初めて外国人講師による全英語（通訳なし）で開催したところ、従来より中高生の割合の高い開催となった。英語で質問する中学生もいて非常に活発なカフェとなった。</p>	<p>地域の自然保護で活動している個人や市民団体からは、地域のハブとして生物・植物のデータベース機能を館に期待されているが、費用の面やスタッフの面もあり、どれだけ期待に応えられるかが今後の課題。少なくとも館庭の生きもの調べは継続していく。</p> <p>パズル展は、貸出開催のオファーも受けるほどの高い企画精度といえるが、今後はこのようなコンテンツを他施設（乃村工藝社の指定管理施設以外を含め）に展開するか（できるか）を検討していきたい。</p>	A	A	<p>現状に満足せず、常にミッションを達成するために、独自の企画や新しい挑戦に取り組んでいる姿勢が素晴らしい。具体的には、大人向けの平日講座、全英語のサイエンスカフェ、数学をテーマとした企画展、活発なアウトリーチ活動など。今後も、これらの事業を継続的に発展させてほしい。</p> <p>また、学習投影が平成29年度に圏域の全校が参加した実績は、これまでの継続的な努力の賜であり、この点も大いに評価したい。科学館事業を推進する体制として、地域で活動している個人や団体との関係を強めることも大きな成果と言えよう。</p> <p>ただし、アンケートで来館者の「満足度」が80%を切っている事業がある点をどう読み取り、今後どう対応していくかの検討が必要。</p>
H30	<p>企画展は、春に圏域の川、夏に圏域の鉄道を取り上げ、圏域の自然と生活にフォーカスし地域づくりの深耕を図った。川では武蔵野美術大学のアーティストと各川を拠点とする市民団体と、鉄道では西武鉄道とJRと密接な連携で意味深い企画展が実施できた。</p> <p>昨年度から始めた大人向け平日講座は、地球科学だけではなく現代天文学、地学フィールドワーク、プログラミング、ハーブドリンク作りと種類・回数を増やしておりほぼすべてが満席の状況となっている。</p> <p>体験学習では、ラボや科学教室での参加型教室を実施した。</p> <p>昨年度末に揃えたプログラミング教室用機材を使用し、また連携先の聖望学園のサポートもあり、プログラミング関連教室は、教師向け、大人向け、子供向けの各教室の実施が本格スタートし、圏域のプログラミング教育の先陣を果たし注目されている。</p> <p>サイエンスレクチャーやサイエンスカフェでは、連携先の高エネルギー加速器研究機構（KEK）、カプリ数物連携宇宙研究機構（Kavli IPMU）、東京大学 宇宙線研究所（ICRR）他の連携先に加え、従来大学施設などで開催されていた仁科記念講演会をプラネタリウムドームで開催し、仁科記念財団理事長の小林誠先生（2008年ノーベル物理学賞受賞）に開会の挨拶をしていただいた。</p>	<p>圏域にスポットを当てた展示には集客力の面で課題が残るが、参加性を高めるなどの工夫を加え今後も取り組むべき課題としている。</p> <p>2020年より開始されるプログラミングについて、圏域の学校からの支援要請が多く寄せられているが、どれだけ要望に応えられるか体制整備を進めたい。</p> <p>また利用者の少ない中学生・高校生・大学生については、圏域大学や高校との連携ワークショップも試みたい。</p> <p>科学館の魅力のひとつに充実したコンテンツがあるが、予定調和化しつつある常設展示をスタッフが意識的に解説手法も含め変えていく力を伸ばしたい。</p> <p>懸案となっている博物館相当施設登録については、標本整備などを進め、組合と協力して登録実現を図りたい。</p>	A+	A+	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>地域づくりの深耕のなかで、圏域の川や鉄道などの地域に根差した資源や情報を活用し、市民団体や大学との連携協力で意義深い内容の企画展を実施している点を高く評価する。</p> <p>また、今後学校より要望増加が見込まれるプログラミング対応のために、その機材を早期に導入・活用し、各対象に向けた教室をスタートさせ本格実施につなげており、新たな事業にも取り組み毎年進化がある点も高く評価したい。</p> <p>今後の課題・今後の期待</p> <p>大人向け平日講座については、平日の来館者増や生涯学習の場の拡大にもつながるので、今後一層の充実を図ってほしい。また、展示やプログラムを実施する際には、来館者側に立ち、館の使命（ミッション）と来館者の求めるもの（ニーズ）のすり合わせに一層留意されることを期待する。</p> <p>博物館相当施設登録をめざして、今後も指定管理者と組合が一体となって協力し、実現に向けて一層の努力をしてほしい。</p>

4. 評価結果（定性評価）

自己評価			外部評価	
今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
<p>R1</p> <p>春の企画展は文房具をテーマとして開催。進学・進級の時期であることと参加性を高めた展示効果とも重なり春の企画展としては過去最大の来場者となった。地域連携を意識した武蔵野美術大学と連携した利用者参加の地域地図作成イベントも好評であった。(54,160人、137%の利用率)</p> <p>夏の企画展は3年毎恒例の「昆虫展」を開催、さすがに昆虫は人気が高く夏休み中の来館者は、3年前には僅かに及ばなかったがその時に次ぐ来館者となった。昨年度から開始したプログラミング関連では、小学4年生の学習投影で来館する生徒向け学習プログラムで、プログラミング体験を希望する学校が9回に増、学校へのアウトリーチでも10回中9回がプログラミングの実施が求められる等、令和2年度から始まるプログラミング教育への関心の高さと、学校側の持つ危機感とニーズが強く感じられる。</p> <p>中高生から大人を対象とした講演会やサイエンスカフェも宇宙や物理だけではなく、食品や数学といった分野へ広げた。</p> <p>また、今年度は2カ月に1回程度の割合で、平日に大人向けプラネタリウムをスタート。内容はレベルの高い科学分野だけではなく文化や芸術にも及び、リピーターも徐々に増えてきている。</p> <p>今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため2月29日から臨時休館し、3月下旬から開催予定であった春の企画展「ロクト運動サイエンスパーク」が中止となった。</p>	<p>国の緊急事態宣言を受け、4月・5月を臨時休館として6月より開館となる。(休館は2月29日より)</p> <p>開館後も当館の大きな特徴の一つである来館者との対話・体験型でのワークショップの開催が困難であることや、館内の滞留者数制限・プラネタリウムの入場者数制限の実施も必要であるため、当面はマスク装着、SDの確保・手指消毒・3密を避けるの最善の対応を行う。</p> <p>新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3密となる体験型プログラムは今年度自粛となる事により、アバターや遠隔ロボット解説、Zoomによるワークショップなどのプログラム開発に取り組む。</p>	<p>A</p>	<p>A</p>	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>過去最大の来場者があった春の企画展は地域の知の拠点であるべき大学を活用する連携事例となり、他の事業においても展示、プログラムとも、質・量ともに充実した内容であった。また、学校側のニーズが高いプログラミング等の事業にも注力して、プログラムの設計・実施をし、学校側の期待に応えている点を評価する。</p> <p>3月以降は新型コロナウイルスの対応としてZoom型ワークショップなどの開発に取り組むなど次年度の対策に向けた計画を始め、館の活動を止めずに発信していた点も科学館事業として高く評価できる。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>プログラミング教室は館外活動としてニーズも高く、今後さらなる発展を望む。</p> <p>また、サイエンスカフェなどの講演会は幅広い分野にわたるテーマが好評であるのでテーマを拡げて実施していくことや、平日大人向けプラネタリウムの観覧者においてリピーターが増えていることは望ましいので、今後機会を増やしていくことに期待する。</p>

自己評価			外部評価	
中期3カ年の取組結果・成果	現状の課題・次期3カ年の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
<p>中期3カ年 H29~R1</p> <p>「多様な学びの場の創出」をめざし、0歳児からシニアまでの全ての世代を対象として、実感を伴う理解を目指した多様な学びの場を創出し、その成果は利用者数にも現れている。徹底した内製コンテンツの取り組みによる成果も上がり、スタッフのスキルもそれに伴い向上を果たした。</p> <p>その中でもこの3年間の最大の成果は、プログラミング教室用機材を整備し、連携先の聖望学園とのコラボレーションにより、プログラミング関連教室の実質的な運営が可能になったこと。さらに教師向け、大人向け、子供向けの各教室の実施が本格スタートし、圏域のプログラミング教育の先陣を果たし注目されている。</p> <p>博物館相当施設指定に向けた標本整備が進み、現展示の再評価につながっている。新型コロナウイルス禍の3月には、テレワークや科学教育のためのコンテンツやプログラムに活用できるよう展示のオープン・データ化に取り組み、試験的に35件をネット配信し、その後6月末で339件のコンテンツを発信した。今後は利用しやすい構造化に取り組む予定である。</p>	<p>最大の課題は学校連携である。プログラミングはある一定の成果につながったが、授業の一環としての科学館利用には至っていない。プログラミング教育の推進にはハブとなる学校や教師との連携が必要と考える。今回の新型コロナウイルスでのテレ授業などでの学習の組み立てなど、残りの4年で計画し実行に移行することが長期的課題である。プログラミング学習については、NHKの教育用オープンコンテンツを利用したテレワークの授業プログラムの作成プログラムなどを重点的に取り組んでいきたい。</p>	<p>A+</p>	<p>A</p>	<p>中期3カ年事業の成果に対する評価</p> <p>「科学」をテーマに地域の生涯学習拠点として、充実した活動を継続的かつ発展的に実施した3年間であった。</p> <p>事業目標である「多様な学びの場の創出」については、0歳児からシニアまでの幅広い世代を対象に「実感を伴う理解を目指した多様な学びの場」を実現し、利用者数の増加に成果が現れている。</p> <p>また、近年重要性を増している多文化共生、ソーシャル・インクルージョンといった視点を掲げて、学校や地域などへのアウトリーチ活動を行っている点や、展示制作やプログラムコンテンツの内製化促進により、コスト改善とともにスタッフのスキルの向上にもつながっている点も評価する。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>常設展示、企画展示、プラネタリウム、大型映像の満足度は中期目標の80%にコンスタントに到達するよう継続的な努力を要する。</p> <p>また、学校との連携においては、次の中期計画、今後30年先の科学館を考える上での最重要課題として学校側の利便性を最大限考慮しつつ、地域の科学博物館ならではの教育の提供を行なうことを期待する。</p> <p>新型コロナウイルスの影響により、テレワークや科学教育の活用併せて、展示のオープンデータ化に取り組み、発信したことを評価する一方、今後は、ネットワークによるコンテンツ配信などの取り組みの重要性や学校側からの期待も高まると考えられるため一層の取り組みを推進してほしい。次期の活動にも期待を込めて、A+に近いAとする。</p>

1. 事業目標ならびに事業方針

注：事業目標・取組方針内の赤字は、「ローリングプラン2016」で修正された箇所。

第2次基本計画			指定管理者・事業計画
事業領域	事業目標-2	取組方針	H29年度～H31年度（中期）事業の基本方針
事業計画 地域拠点事業	多摩六都の交流拠点 多摩六都科学館は、地域の人々が世代を超えて交流し、生涯学習や社会参画の場として活用できるよう、地域の交流拠点（ハブ）となります。	圏域市民の生涯学習への支援活動の拡充をめざします。また、地域の課題解決に向けたコミュニティの再生や共助社会づくりをめざして、多様な人々に広く開かれた地域コミュニティの交流拠点としての機能（中間支援機能*6）強化をめざします。	幅広い年齢層が科学を仲立ちとして交流・連携する場の創出 ソーシャル・インクルージョンをベースに、地域の課題解決やコミュニティの再生を果たすべく、科学館が地域の交流拠点（コミュニケーション・プラットフォーム）となって、地域づくりに取り組む市民団体や研究機関などの活動を支援し地域づくり人材のサポートならびに育成へとつなげていきます。 幅広い年齢層が気軽に利用できる機会や学びの場の創出で、地域の方々が地域の価値にアクセスできる環境を市民とともにつくりあげていきます。今後は地域市民の代表である友の会会員とも「ともにつくりあげる」関係づくりも進めます。

2. 中期の重点戦略ならびに業績指標

3. 評価結果・指標の実績結果

赤字：新規の指標あるいは「ローリングプラン2016」で改訂された箇所 セル黄色：市民モニター関連 青字：実状に沿うよう指標ならびに測定方法等を見直したもの 評価結果欄の斜め線：調査未あるいは定性評価として実施

重点戦略	事業概要	業績指標	定量	検証方法	中期目標（目標値）	前中期			今中期			中期3カ年 実測値	H28調査 参考値
						H26	H27	H28	H29	H30	R1		
地域の人々が立場を変えつつも人生を通して、科学館ボランティアや友の会等の自主的な活動によって成長し、社会貢献し、自己実現できるよう支援活動を行います。	II-2-1	● ボランティアの科学館事業への支援延人数	*	A	3,000人以上 10人以上/1日 (開館日数300日)	3,950人	4,425人	5,277人	5,131人 17人/1日	5,033人 17人/1日	4,233人 16人/1日 (開館269日)		
		● ボランティア主催事業回数	*	A	12回以上 (1回/月)以上	14回	25回	33回	50回以上	50回以上	50回以上		
		● ボランティアによるプログラム開発		B	検討/実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施		
圏域市民の生涯学習に対する支援の拡充を図ります。科学館内だけでなく、地域との連携を図り、生涯学習の場と機会をつくり、コンテンツの提供を図ります。	主に II-2-1	● 市民活動支援事業		B	検討/実施				実施	実施	実施		
		● 市民活動支援事業		D					A	A	A		
		● 生涯学習に係る事業への取組		B	検討/実施				実施	実施	実施		
場づくりだけでなく、地域の多様な主体がつながるためのきっかけづくりや関係を深めるための交流事業を行います。		● 地域づくりのための交流事業の実施		B	検討/実施				実施	実施	実施		
		● 地域づくりのための交流事業の実施		D					B	B	A		
コミュニティカフェを科学館に導入（平成29年3月17日事業開始）。新たな地域コミュニティの交流の場・市民の社会参画の場として事業展開を図ります。		● カフェ利用者数（発券枚数による）	*	A					47,455人	51,198人	45,070人		
		● カフェ利用者ならびにカフェ事業者の満足度	*	A	測定時期要検討 測定方法要検討								
中期的な指標		生涯学習施設としての評価	*	E									4.57
		指標：各世代にわたって生涯学習の推進に貢献できる科学館	*	E									4.46
		地域の交流拠点としての評価	*	E									4.17
		指標：地域の人々が世代を超えて交流できる科学館	*	E									4.17
		「多くの圏域市民が参加し盛り上げていける科学館」としての評価（定量）	*	E									4.17
<組合>		● コミュニティカフェとしての実現度・有効性		F	中期の指標とする							A	
		「多くの圏域市民が参加し盛り上げていける科学館」としての評価（定性）		F									A
II-3-1		● 友の会会員数（削除）	*	A	1,500人以上								
		● 友の会市民モニター取組（削除）		B	検討/実施								

平均値：4.94

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
H29	<p>ボランティア活動は活発に行われていると共に、会としてほぼ独立した組織としての体制が整い自律的な運営がされている。指定管理者として必要最小限の支援を引き続き行いが、サポートの立場に留め、さらなる自立を促す。</p> <p>指定管理運営開始以降に活動に加わられた方の新規プログラムと、ベースとなっている活動のバランスと内容が充実し、さらに活動が活性化し利用者から高評価を得ており、他施設からのボランティア活動に関する視察が増えている。</p> <p>昨年度までの友の会の年間パスポート機能とメンバーシップ機能の分離に関し、年間パスポート購入数は友の会会員数の3倍以上に達し、しかもその2/3が圏域市民であり、圏域市民リピーター増＝圏域還元大きく貢献できている。</p> <p>逆にメンバーシップ入会者数は友の会会員数の1/3となっている。</p>	<p>ボランティアの代表、執行部のスムーズな代替わりがスタートし2年経過したが、意識の高い方と遠慮深い方の調整が課題。</p> <p>ジュニアはやはり社会的ニーズの反映なのか50人と大幅増。しかし経験豊富な先輩が指導するなど、いい方向に向かっており、きっちり育成し地域人の先導としたい。</p> <p>メンバーシップに関して、大型映像試写会招待やプログラムの優先参加権は今後も継続するが、今後はさらにパイロットプログラムのモニター参加者としての位置づけを強化し、今まで以上に来館者ニーズに合ったプログラム開発に役立つ役割を担ってもらうことにより、館とメンバー両者に取の良い関係構築を進める。</p> <p>またメンバーの適正人数を見極めていく。</p>	A	A	<p>ボランティアの科学館事業への支援延人数や主催事業が50回以上という高い数値であること、自律的な運営を行っていることは大いに評価できる。</p> <p>ボランティア活動自体は活発でA+と評価できるが、科学館側がボランティア活動の「支援」から「連携」に軸足を今年度から移したばかりで、十分な活動連携には至っていないため、今年度はA評価とする。</p> <p>ジュニアボランティアの人数が増え、活発な活動が行われていることから、将来につながる地域との連結が生まれていることがうかがえる。</p> <p>友の会制度を見直し、年間パスポートとメンバーシップ（ロクトメンバーズ）に分離したことによって、年間パスポート購入数が旧友の会会員数の3倍に達したこと、圏域割引を設けたことは、良い試みであったと思う。今後は、ロクトメンバーズへの加入数を増やすための方策を検討してほしい。</p> <p>活動指針としてソーシャル・インクルージョンを掲げたことによる、これからの活動展開に大いに期待している。また、「地域のハブになる」という目標に対して、市民モニターの意見は非常に重要なので、そこで上がってきた問題点に今後も引き続き向き合い、事業計画などに反映してほしい。</p>
H30	<p>ボランティア活動は、その活動内容に高い評価を受け、外部の団体からも注目されている。</p> <p>ボランティア会主導のプロジェクトも正月の昔遊び、イベントホール・科学学習室を使つての市民感謝デーでの科学実験ショー、学芸大学の科学の祭典への出展に加え、学校や公民館などへのアウトリーチ活動も数多く実施している。</p> <p>また、ボランティア会主催で実施されている「たまろくサイエンスラボ」はほぼ月2回のペースで開催されており、ハイレベルな内容のものも多く毎回多数の応募があり、いつも満員の状況にある。</p> <p>ジュニアボランティアについては、塗り絵を実質的に運営するなど先輩後輩のチームワークの良いコミュニケーションがみられる。</p> <p>指定管理者としても、自主独立したボランティア会との協力関係は極めて良好な関係にあると考えている。</p> <p>科学館事業の項でも記載したが、大人のための平日講座を拡大しており、シニアの生涯学習機会の提供で効果をあげつつあると共に、併せて子供向け、赤ちゃん向け、障がい者向けなどプログラムの多様化を進めた。</p>	<p>ボランティア活動については、昨年から引き続き、役員互選の進捗が課題であるが、ともしれば避けがちな話し合いができたつあり、1か月交代などというボランティア活動にマッチングした具体案などがその話し合いの中から生まれていることは大きな前進である。本論に入り込んだ議論を進めることを期待したい。</p> <p>また、ジュニアボランティアの中にリーダー的人材を意識的に育成したい。</p> <p>学校利用向けの学習の手引きはあるが、シニア用の学習の手引きがあってもよい。</p> <p>⑤ 財政計画・体制整備でも記載するが、「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト」が文化庁からの助成事業として採択された。（平成31年度）</p> <p>これにより来年度から漸く科学館が地域の交流拠点となり、ソーシャル・インクルージョンをベースに、地域の課題解決やコミュニティーの再生に着手できる経済的基盤が整った。</p>	A	A	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>ボランティアとの協働はすでに質・量とも高く持続していることは高く評価する。</p> <p>また、オリンピック・パラリンピック以降、ますます重要になると思われる多文化共生やソーシャル・インクルージョン（社会包摂）の視点を持ち、文化庁の「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プログラム」助成事業の助成獲得に積極的に動いている点を高く評価する。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>ジュニアボランティアの活動を高く評価する一方で、応募者の減少が見られる点やボランティアの組織体制を強化することが今後の課題である。</p> <p>ソーシャル・インクルージョンおよび地域のハブになるというコンセプトはすばらしいが実体化はまだこれからである。助成事業が採択されたことは、今後の地域拠点事業を推進する上で重要な寄与となると思われる。次なる展開に期待したい。</p>

4. 評価結果（定性評価）

自己評価			外部評価	
今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総括的な意見等）
<p>R1</p> <p>ボランティア活動は今期も極めて活発に実施されている。主たる活動場所の「からだラボ」は週末は常に人だかりの人気スポット。「たまろくサイエンスラボ」は高いレベルが維持され、常に満席の状態で開催され参加者の満足度も高く、なによりボランティア自身が科学館体験を一番楽しんでいる感がある。</p> <p>しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大を受け、ボランティア活動は2月26日から休止とし、さらに2月29日からの臨時休館により活動停止となっている。</p> <p>文化庁助成金事業「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト」は、今年度は圏域内に在住する外国にルーツを持つ市民を対象として、スタッフ向けにやさしい日本語研修やパンフレットの多言語化・やさしい日本語のホームページの開設を実現した。また、やさしい日本語でのワークショップの開催、全国の科学館等における多文化共生事業取り組み、調査を行った。</p> <p>今年度ソーシャル・インクルージョンの一環として、映画館や劇場等からは泣き声をだすことで敬遠されがちな乳幼児を受け入れる、0歳からのプラネタリウムを平日に開催したところ、開館以来平日としては初の満席となり、5回開催した内4回が満席で他の1回も残りわずかとなる程の盛況であった。出かける先の少ない乳幼児を持つ家庭の行先を求める需要の大きさが認識できた。</p>	<p>活動停止となっているボランティア活動は、6月1日までの臨時休館終了以降も、ボランティア会の主たる活動場所である「からだラボ」が、来館者との対面での対応を主体とした活動であることから、3密を避けることが要求される中で、再開の見通しが立っていない。Zoom等オンラインを活用したワークショップ参加や遠隔解説など活躍機会・場所を開発する。</p> <p>文化庁助成金事業「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト」は助成額も倍以上(510万)で令和2年度も継続することが決定しているが、新型コロナウイルスの影響はあるが新たに武蔵野大学のグローバル学部との連携プロジェクトやYSCグローバルスクールの講師に助言をもらいながらプログラムの充実を図っていく。</p> <p>また、昨年大きな成果を上げることができた、0歳からのプラネタリウムも人が多く集まってしまうため、中止せざるを得ない状況にある。今後定員現状66席から80席でのシミュレーションを行う。</p>	<p>A+</p>	<p>A+</p>	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）の取り組みや、地域の子育て世代の居場所や交流の場として「0歳からのプラネタリウム」を実施したことは地域拠点の役割を果たしている。</p> <p>地域の生涯学習支援拠点であるという意識が、プログラムの設計・実施に明確に反映されていることを高く評価する。</p> <p>特にボランティアの自主的な活動が活発であり、参加者の満足度が高い「たまろくサイエンスラボ」や館内外での活動により、来館者との知的交流が進み、異なる世代が交流できる地域拠点となっている点や、ジュニアボランティアも含めた幅広いバックグラウンドを持った方々がボランティアとして、館の活動を支えている点を高く評価する。</p> <p>文化庁助成金事業の多文化共生推進プログラムを、組織的に事業として推進している点も高く評価できる。</p> <p>今後の課題・今後の期待</p> <p>「地域のハブ」に関する取り組みにおいては、市民モニターの意見にあったように十分な理解に至っていない点も見られることから、圏域市民に向けたさらなる活動の可視化とコミュニケーションが望まれる。</p>

自己評価			外部評価	
中期3カ年の取組結果・成果	現状の課題・次期3カ年の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総括的な意見等）
<p>中期3カ年 H29～ R1</p> <p>●取組方針「圏域市民の生涯学習への支援活動の拡充をめざす」</p> <p>まず第一に、ボランティア活動は活動延べ人数が5,000人/年で、しかも自主運営という「奇跡の団体」となっている。年ごとにその活動は充実度を深めており、「たまろくサイエンスラボ」は極めて高いレベルが維持され、常に満席の状態での開催であり、参加者の満足度も高く、なによりボランティア自身が科学館体験を一番楽しみ、満足度が高いと思われる。</p> <p>しかしながら、新型コロナウイルスの影響で令和2,3年度の活動は難しく、新たな活動形態のデザインが喫緊の課題となっており、現在代表と協議中である。</p> <p>●取組方針「中間支援機能の強化」</p> <p>「0歳児からのプラネタリウム」や文化庁の助成金を受けての「多文化共生プロジェクト」を実施したことで、地域での居場所づくりの重要性を認識できたことである。また、この事業が地域の大学や市民団体との連携での取り組みであることに意義を感じている。今後さらに深耕していく計画である。</p>	<p>オリンピックイヤーになるはずであった2020年は新型コロナウイルスによりソーシャル・インクルージョンにさらに注目が集まった年でもあったが、SDGsのアジェンダに記述されている『だれも取り残さない』が残念ながら停滞したままとなっている。</p> <p>様々な事情により、科学館での体験機会がなかった方への実際の施策を今後4年間で実現する必要がある。</p> <p>今後、文科省のデジタル機器の教育機関への整備が進むことに合わせ、ネット環境でのアクセスを容易にしたデジタル科学館をリアル科学館に重ねるような二層構造が今後一番の可能性と考えている（展示物のデジタル化など）。</p>	<p>A+</p>	<p>A+</p>	<p>中期3カ年事業の成果に対する評価</p> <p>中期目標の指標では3年間にわたって目標を上回る実績を上げ、ボランティア活動は延べ人数が年間5,000人に及び、かつ自主運営という他に類をみない活動となり、ボランティアの自己実現や生涯学習の機会の創出となっている。</p> <p>ボランティア自身が科学館体験を一番楽しみ、高い満足度を得ていることは、科学館の生涯学習機能を体現しているものとして評価でき、科学館の活動の根幹を支えるものとして「科学館との協働」を実現している点を高く評価する。</p> <p>また、中期3カ年の後半に地域の団体や大学と連携し、社会的包摂度の高い取り組みを行い、文化庁の助成事業を実施するなど既存事業の踏襲にとどまらない挑戦をし、地域の拠点作りに邁進してきた点やその意義について自己評価できている点も高く評価する。</p> <p>今後の課題・今後の期待</p> <p>継続的な活動によりジュニアボランティアが成長し、利用者としてあるいは指導的役割を果たす人物の出現も期待できる。</p> <p>一方で「新しい生活様式」にあわせたボランティア活動のあり方を試行及び調整していくことが重要である。 今後は、「未・非来館者」の来館者化、また新型コロナウイルスの対応で進めることとなったデジタル・オンライン化を進め、より一層地域に必要な不可欠な社会教育機関になることを期待したい。</p>

1. 事業目標ならびに事業方針

注：事業目標・取組方針内の赤字は、「ローリングプラン2016」で修正された箇所。

第2次基本計画			指定管理者・事業計画
事業領域	事業目標-3	取組方針	H29年度～H31年度（中期）事業の基本方針
事業計画 地域拠点事業	多摩六都の魅力発信 多摩六都科学館は、地域資源の価値発信拠点です。さらに活動や場を介して、地域の様々な資源をつなぎ、新たな価値を市民の皆さんとともに作り上げ、社会に還元していく創造拠点となります。	3年間で地域連携や地域資源の価値発信は一気に加速し、圏域における拠点施設としての重要度も高まりました。次のステージでは、さらに地域の多様な主体と連携を図り、5市全域の地域資源の価値を学術的に掘り起こし、その価値を圏域内外に周知させていく発信機能の強化を図ります。これによって、圏域市民が地元で愛着と誇りを持ち、圏域外の人々が興味を持ち訪れたいと思える地域になることが最終目標です。	地域資源や市民をつなぐ場／コミュニケーション・プラットフォームへと進化 展示や調査研究活動などを行う際、地域資源の価値発掘と魅力発信も視野に入れて活動を行い、圏域市民の「地域リテラシー」の醸成を図ります。また、「地域参画力」のある人材育成も行いながら、多摩六都圏域を支える諸団体・市民との連携に力を入れ、自律的な市民の地域づくりを支援します。 将来、科学教育のためのコンテンツやプログラムをオープン・データ化できるよう、開発を進めます。

2. 中期の重点戦略ならびに業績指標

3. 評価結果・指標の実績結果

赤字：新規の指標あるいは「ローリングプラン2016」で改訂された箇所 セル黄色：市民モニター関連 青字：実状に沿うよう指標ならびに測定方法等を見直したもの 評価結果欄の斜め線：調査未あるいは定性評価として実施

重点戦略	事業概要	業績指標	定量	検証方法	中期目標（目標値）	前中期			今中期			中期3カ年 実測値	H28調査 参考値
						H26	H27	H28	H29	H30	R1		
地域の自然・文化・歴史・産業など様々な資源を、地域の皆さんと協力しながら、科学的な観点から価値づけ、その価値を広く発信していく活動を行います。	主に II-2-2 1科学館事業 全体	●地域資源をテーマとした企画展の開催		B	検討／実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施		
		●常設展示つながらスポットの充実		B	検討／実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施		
		●地域資源をテーマとした学習プログラムの開発		B	検討／実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施		
		●地域資源をテーマとしたイベントの実施		B	検討／実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施		
	1科学館事業 全体	●上記利用者・参加者の満足度（H29参考値：全体の満足度）	*	C	80%以上が満足 測定方法要検討				89%	89%			
「地域づくり」の第一歩として、地域資源と圏域市民を「つなぐ・めぐる・知る」ための事業を行います。例えば、食・農・健康をテーマにしたローカルツアーや研究所や地元企業の見学会などが考えられます。	2地域拠点事 業全体	●多摩地域の価値を見出せる事業の実施（定性）		D			A	A	A+	A	A		
		●科学教育のためのコンテンツやプログラムなどの開発		B	検討／実施	検討	検討	検討	実施	実施	実施		
こうした活動を通して、地域の人々の「地域参画力」を高めていきます。	組合との協働	●圏域市民を対象とした地域づくりに関するプログラムの実施		B	検討／実施				実施	実施	実施		
多摩六都圏域だけでなく、多摩地域全体にも視野を広げ、気づかずに見過ごしている資源（地域づくりを实践できる創造的な人材やソフトも含む）の掘り起こしを行い、共有できるしくみを整備します。	中期的な指標	■「地域の振興に寄与できる科学館」としての評価（定量）	*	E									4.9
		■「地域の振興に寄与できる科学館」としての評価（定性）		F								A	A
		■「地域資源を生かした運営」に対する評価 指標：地域の資源（自然・文化・ひと等）を生かした運営を実践する科学館	*	E									
		●プログラム公開に向けた取組（削除）		B	検討／実施								

平均値：4.94

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評定	総評（総括的な意見等）
H29	<p>秋の企画展では、食とからだをテーマとし科学的観点からの食とからだの関係を展示すると共に、地域の農家と連携し、食と農への取り組みの展示や、特産品と直売所の紹介も実施した</p> <p>春の企画展では構成5市を流れる川（小平市は玉川上水）をテーマに、それぞれの川を守っている自然保護市民団体と協力し、圏域内外の来館者にその文化歴史や自然の生態の魅力を紹介する展示を実施した。</p> <p>東久留米市出身のアーティスト大小島真木さんに、全88のオリジナル星座絵を依頼、その絵をもとにプラネタリウム番組を作成し投影。シニアにも満足いただける内容であるため特に圏域からの集客に貢献し、6月の入館者数の記録を塗り替えた。</p> <p>また、投影期間に合わせ、今年度からカフェを運営し地元野菜をふんだんに使ったメニューを提供している『六都なおきち』とのコラボレーションで『大人のカフェ&シアター』キャンペーンを平日限定で実施し、これも好評を得た。</p>	<p>春の企画展・秋の企画展では今まで交流の無かった地域の農家の方や、地域の自然環境保護系市民団体の方とのつながりが広がった。</p> <p>この自然環境保護系市民団体は、高齢化の悩みを共通に持っており、運動を切らさないための科学館としての対応として何ができるかを計画していく。</p> <p>プラネタリウム番組で地域性を出すのは困難な中、昨年度の西武鉄道の車窓の風景や清瀬のみまわりに続き、今年度は下野谷遺跡との連携や圏域のアーティストと組むという手法で実現したのは大きい。今後も地域を題材としたプラネタリウム番組の作成を継続する。</p>	A+	A+	<p>企画展で地域資源の価値発信を積極的に行い、プラネタリウムのプログラム開発では圏域のアーティストと連携を図るなど、地域に軸足を置いて活動をしている点を大いに評価したい。また、科学と異分野をつなぐ活動や、自然環境保護系の市民団体との新たなつながりが生まれた点など、地域拠点としての役目を果たしていると思う。</p> <p>今後は、さらにテーマの深掘りを学術的に推し進め、地域に密着した進化した企画展なども開催してほしい。また、地域資源を科学的な観点から示す企画展にも挑戦してほしい（例えば、土壌の微量元素を測定し、圏域の農産物・果実の特徴を科学的に示す展示など）。</p>
H30	<p>昨年度から引き続き開催の春の企画展では、構成5市を流れる川をテーマとした展示を行い、夏の企画展<鉄道展2018>では「駅からみえる まち・ひと・技術」というテーマで、鉄道を技術面だけでなく、鉄道の発展と共にある地域の発展とそこに住む人々という視点からも深耕できた。</p> <p>第2次基本計画も残すところ5年となったが、スタッフの意識にも地域づくりの定着が見られ、圏域の環境自然地図が頭の中に描かれつつある。</p> <p>西武鉄道、シチズン、グロープライド、情報通信研究機構（NICT）などとの連携を参考に、行政や圏域の商工会との連携も「市民感謝ウィーク」を機に進みつつあり、地域のハブ化が具体的に進んだ。</p> <p>連携協定締結の東大生態調和農学機構、行政、市民、科学館の連携で運営されている「農と食の体験塾」も5年目となり、今年は市民の主導で25回の教室開催となり、事業計画の基本方針にある「自分の科学館/地域の科学館」という意味での『Of the people』が実現したことは大きい。</p>	<p>企画展に関わったスタッフや日頃圏域市民との関係が深いスタッフと同レベル程度に、すべてのスタッフが具体的に圏域イメージ形成を進めたい。</p> <p>東大大豆塾での塾生とスタッフの関係形成も進み、オープンサイエンスの基盤となるコミュニケーションの深耕をさらに進めたい。</p>	A	A+	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>行政や圏域の商工会等との連携による「市民感謝ウィーク」の実施により、「地域のハブ化」が進んでいること、圏域市民に対するサービス拡充につながる良い企画であることを評価したい。このような取り組みを通じて、組合から指定管理者へのガバナンスが機能していることがうかがえる。</p> <p>また、「農と食の体験塾」が5年継続し、発展がみられることから地域のハブとなる活動が積極的に行われている点を高く評価する。</p> <p>圏域企業との連携深化とともに、その協働によりスタッフの意識に「地域づくり」の定着が見られ、「圏域イメージ」が形成されつつあること、地域密着型の企画展を充実させ地域とのつながりを深めたことを高く評価したい。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>今後は、すべてのスタッフが同様に「圏域イメージ」を具体的に形成できることを願っている。</p>
R1	<p>④のマーケティングでも記載していた「市民感謝ウィーク」は、「圏域市ウィーク」と名前を変え地域の価値・魅力を伝える事業としての側面が強くなったため、今後結果・成果は③地域拠点事業-2での記載に変更する。</p> <p>「圏域市ウィーク」と、運営連絡協議会でのテーマ「北多摩の農と食」を共通化し、各市の市民ウィーク時にその市の農と食に関するイベントを同時開催し、それぞれの市民が自分の市の農と食に対する取り組みの一部を知る機会を提供することができた。</p> <p>圏域の団体・企業・公共施設・行政等と連携や協力して実施したイベント等は前年比30%増の30件を超え、つながりが大きく拡大している。</p> <p>また、今年はICOM（国際博物館会議）が京都で開催され、会議にあわせ、ICOM-CAMOC（都市博物館の活動・コレクション国際委員会）と共催し、ポストカンファレンスツアー東京編の一つの西ツアーの企画・運営を行った。世界7か国から21名を迎え、当館の視察、当館スタッフとの意見交換、また多摩北部の魅力を伝えるべく、玉川上水と小平市ふれあい下水道館の見学後、東京都美術館で東ツアーの参加者と合流し、全体交流ワークショップを実施した。本イベントを通じ、外国人からみた当館の価値を再発見することができた。</p>	<p>数年に渡って培ってきている地域とのつながりや地域の価値の発信は大きく広がってきているが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、多くの人を集めるイベントの開催がままならない状況で、地域とのつながりが切れないようにするにはどうするかを今後考えていく必要がある。カギはデジタル化、テレワークならぬテレ地域である。</p> <p>博物館のグローバルスタンダードを形成する組織ICOM（国際博物館会議）の実績資産を受け継ぐべくMDPP（博物館の定義、見直しと可能性）とSDGsとの親和性も考慮に入れた社会包摂型マーケティングを構築する。キーワードは「誰も取り残さないマーケティング」</p>	A	A	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>科学から広がるテーマとして「農と食」をかかげた、「圏域市ウィーク」は、「市民感謝ウィーク」から名称変更し、地域資源のさらなる掘り起こしに寄与している。</p> <p>また、圏域の団体や企業、公共施設や行政等との連携イベントの拡大やICOMのカンファレンスツアー実施は国内外へ多摩六都科学館及び5市の価値発信を促進させている点で評価できる。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>地域の資源の豊かさ、科学館の魅力を考えると今後さらに地域拠点事業を拡大・充実できる余地があると考えられるので、引き続き連携・協働事業に力を入れてもらいたい。</p>

4. 評価結果（定性評価）

自己評価				外部評価	
	中期3カ年の取組結果・成果	現状の課題・次期3カ年の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
中期 3カ年 H29~ R1	<p>今季3年間での最大の成果は、運営連絡協議会が実質的に地域の農家とつながったことであり、委員との意見交流が現場も交えて具体化したことである。</p> <p>「北多摩の農と食」をテーマとし、各市の「市民ウィーク」時にその市の「農と食」に関するイベントを同時開催し、それぞれの市民が自分の市の「農と食」に対する取り組みの一部を知る機会を提供することができた。</p> <p>その意味で運営連絡協議会との連携のあり方が共有でき、さらにノウハウができたことで、よりリアルな『地域づくりに貢献する』事が館スタッフや地域の方にも実感できた。この成果は、次のステップである「地域参画力」のある人材育成につながっている。</p> <p>「地域参画力」では2014年から継続した東大生態調和農学機構・市民・科学館連携による大豆塾。6年間で参画した市民は150名を数え、地域の農からグローバルな農までを視野に入れ、地域の農業の在り方について実質的な意見交換によるアプローチができています。これを機会に東京大学側から実質的連携先として要望があり、2017年（H29）に連携協定締結に結び付いた。</p>	<p>数年に渡って培ってきている地域とのつながりや、地域の価値の発信は大きく広がってきているが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、多くの人を集めるイベントの開催がままならない状況で、地域とのつながりが切れないようにするにはどうするかを今後考えていく必要がある。カギはデジタル化、テレワークにあると考えている。</p> <p>博物館のグローバルスタンダードを形成する組織ICOM（国際博物館会議）の実績資産を受け継ぐべくMDPP（博物館の定義、見通しと可能性）とSDGsとの親和性も考慮に入れた「社会包摂型マーケティング」を今後は構築していく計画である（キーワードは「誰も取り残さないマーケティング」）。</p>	A+	A	<p>中期3カ年事業の成果に対する評価</p> <p>市民感謝ウィークを「圏域市ウィーク」としたこと、令和元年度には「北多摩の農と食」をテーマに各市の「農と食」に関するイベントを同時開催した効果を高く評価する。</p> <p>運営連絡協議会が地域のハブとして実質的に地域の農家とつながり、委員との意見交流が現場も交えて、地域資源の価値の掘り起こしと価値発信が具体化したことは、科学館が地域の中で大きな役割を果たすことにつながる大きな成果として評価する。</p> <p>また、スタッフが地域づくりに貢献することが実感できるようになったことも評価できる。地域資源として東大生態調和農学機構と連携し、市民・科学館と展開した大豆塾等の事業は多数の市民を参画させ、地域の農業のあり方を考える機会となった点も評価できる。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>指標の実績結果は目標通り達成しているが、地域の価値発信拠点として、地域の多様な主体のコミュニケーションプラットフォームへ進化するためにはさらにコンテンツが必要であり、次期3カ年の課題として取り組んで欲しい。</p>

1. 事業目標ならびに事業方針

註：事業目標・取組方針内の赤字は、「ローリングプラン2016」で修正された箇所。

第2次基本計画			指定管理者・事業計画
事業領域	事業目標-4	取組方針	H29年度～H31年度（中期）事業の基本方針
経営計画 マーケティング	愛着の持てるロクトへ 多摩六都科学館は、圏域市民の認知度・利用度を高め、利用者の満足度向上をめざします。さらに、市民から愛着を持って「自分の科学館／地域の科学館」と認められる存在となります。	圏域市民の認知度・利用度・満足度のアップをさらにめざします。長期的には、圏域市民の科学館に対する価値観を高めることをめざします。 多摩六都科学館が推進している取組方針を圏域市民に理解してもらえる機会や接点を作り、社会とのよりよい関係づくり（パブリック・リレーションズ機能）の強化を図ります。	「利用者中心」に一元化されたコミュニケーションマネジメントによるマーケティングの展開 コミュニケーションを重視した「DO！サイエンス」をさらに充実するため、最有力顧客であるファミリー層と、開発目標のシニア層をターゲットとした市場調査を行い、サービスの最適化を図ります。また、事業評価を的確にフィードバックし、サービス内容のさらなる向上につなげます。これらのサービスをターゲットマッチングを意識してタイムリーな広報・PR活動を行います。 今後も、アテンドや広報スタッフだけでなく、一人一人のスタッフが「利用者中心」に一元化したマーケティング発想をもとにした事業展開が可能となるマーケティングマネジメントを行います。

2. 中期の重点戦略ならびに業績指標

3. 評価結果・指標の実績結果

赤字：新規の指標あるいは「ローリングプラン2016」で改訂された箇所 セル黄色：市民モニター関連 評価結果欄の斜め線：調査未あるいは定性評価として実施

重点戦略	事業概要	業績指標	定量	検証方法	中期目標（目標値）	前中期			今中期			中期3カ年 実測値	H28調査 参考値	
						H26 実測値	H27 実測値	H28 実測値	H29 実測値	H30 実測値	R1 実測値			
● 利用状況やニーズを分析し、認知度・利用度・満足度を高める ● 取組みを中長期の観点から推進します。利用者を第一に考え、常に質の高いサービスを提供します。	II-3-2	● 利用者の満足度（全体・総合的な満足度）	*	C	80%以上を維持	88.8%	89.8%	83.8%	89.4%	88.6%	89.9%			
● 市民や利用者の声を長期的に反映させるしくみ、ダイレクトに ● 運営側に取り込めるしくみとして、市民モニター制度などの拡充を図ります。	組合との協働	● 市民モニター制度の実施		B	検討／実施				実施	実施	実施			
● 多摩六都科学館が圏域市民のために運営されている施設である ● ことや今後の取組方針を周知し、理解者・賛同者を増やしていく活動を積極的に展開します。	II-3全体	● ロクトメンバーズやクラブ会員、ボランティアによるモニタリングの実施 ● 科学館の取組周知活動の実施		B	検討／実施				実施	実施	実施			
● これまで同様、利用者向けのマーケティング戦略も重視する一方、今後は未利用者向けや地域づくりに携わっている圏域市民向けの対応策も検討します。また、事業ターゲットを想定した圏域市民の年代別人口構成の分析なども行います。	II-3全体	● マーケティング戦略の作成 ● 未利用者への利用促進策の実施 ● 未利用者への利用促進策の実施		B	検討／実施				実施	実施	実施			
● 広報については、エリア戦略とプロモーション戦略を検討し、効果を分析しつつ、有効かつ効率的な方法で展開します。	II-3全体	● 広報戦略の策定		B	検討／実施				実施	実施	実施			
● 組合の主導のもとアクセスの利便性を高め、さらに改善を図るために、バス運行の導入を検討します。	II-3全体	● アクセス改善・交通の便改善に向けた取組（協力）		B	検討／実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施			
● 障がいのある方も、外国の方も、誰もが利用しやすいインクルーシブな（包括的な）ソフト・ハードの整備を図ります。	II-3全体	● 誰もが利用しやすい事業の実施（定性評価） ● ソーシャル・インクルージョンの観点から		B	検討／実施				実施	実施	実施			
中期的な指標	<組合>	「自分の科学館／地域の科学館として価値ある存在」としての評価指標：ここ3年間の活動は、ご自分にとって、家族にとって、地域にとって価値あるものだったと思えますか。	*	E									5.8	
		「市民から愛される科学館」としての評価指標：自分の科学館・地域の科学館として市民から愛される科学館	*	E										5.48
		「市民から愛される科学館」としての評価		F									A	A+
		「交通の便を改善し利用しやすい科学館」としての評価	*	E										
		圏域市民の科学館の認知度・利用度・満足度	*	E										
● 利用者の声を反映した改善を可能とするしくみ検討に関する取組（削除）	組合との協働			B	検討／実施									

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
H29	<p>小学校4年生向け学習投影に、東久留米市の小学校だけが全校利用となっていないが、平成27年度3校、平成28年度2校の未利用が、今年度漸く全校利用となった。地道に校長会などでの案内を継続した事や、館自体の認知度の向上によるものと考えている。</p> <p>来年度の学習投影にも圏域内のすべての小学校が引き続き利用してもらうと共に、圏域外からの小学校の利用拡大をめざし、『学習利用の手引き』を分かりやすく且つ利用意欲が高まるような内容にリニューアルし配布した。</p> <p>昨年度の課題として記載したシニアキャンペーンに替わる新たなキャンペーンとして、「大人のカフェ&シアター」（③地域拠点事業-2に記載）を企画し、新聞折込などの広報を実施し大きな効果が上げられた。</p> <p>運営連絡協議会は秋の企画展と並行して『北多摩の農と食』をテーマに開催し、メンバーには地域の農家の方々にも加わって頂き、平成30年度末を目標に科学館として北多摩の農と食の魅力を如何に発信していけるかの検討をスタートさせた。</p>	<p>来館者に対する直接の声掛けによるアンケートと、来館者の年代をチケット発券時にデータ化し、来館者情報の正確な把握は継続しており、それらの情報を基に、開催するイベントのタイムリーな広報は引き続き継続する。</p> <p>しかしながら日曜祝日はこれ以上の利用者の増加は館のキャパシティ的に難しくなっており、今後は平日利用が可能な世代を中心とした未利用者向け広報を拡大していく。</p> <p>学校利用をさらに充実させるための一環としてリニューアルした『学習利用の手引き』を手掛かりに学校での学びに深くかかわれるような利用手法を開発する。</p> <p>運営連絡協議会ではテーマ『北多摩の農と食』を魅力発信に留まらずオリジナル商品開発レベルに高めることが今後の課題。</p>	A+	A+	<p>学習投影が圏域全校利用となった点や、「大人のカフェ&シアター」などの企画が成功しているのも、マーケティング活動の成果と考えられる。</p> <p>また、圏域内の小学校の継続利用と圏域外の小学校の利用拡大をめざし、『学習の手引き』をリニューアルし、学習利用の質を高めるだけでなく、新たな利用者層の獲得に努力している点も高評価である。</p> <p>さまざまなメディアを通してマスとローカル両面から広報活動が多様に行われている点は継続しながらも、今後は未利用者を利用者へと変えるアプローチをさらに進めていただきたい。</p>
H30	<p>圏域市からの要望の高かった「市民感謝ウィーク」を今年度からスタートし、産業振興にも道を開いた。地域づくりに欠かせない、圏域行政の広報部門・産業振興課そして商工会との連携が本事業で深まった。</p> <p>学校利用をさらに充実させるためリニューアルした『学習利用の手引き』を手掛かりに、下見のための実地踏査ツアーの実施で教師の活用レベルの向上を図り、成果が上がりつつある。学校での学びに深くかかわれるような利用手法を開発中である。</p> <p>運営連絡協議会においては、近隣農家の秋田農園をハブにした圏域の地に足が付いた実質的な協議会運営が具体化し、継続的に参加者相互で協議会を育てる事ができている。</p> <p>「ロクトニュース」が創刊100号を迎えるに当たり、全面リニューアルを行い2月に発行した。従来年間5回発行していたが、今後は年間6回の発行とした。またリニューアルに合わせ、毎月発行していた「催し物案内」と「ロクトニュース」で内容が重複している部分があったため、これらを統合し、より分かりやすくかつ合理化を図った。</p>	<p>「市民感謝ウィーク」は現状では顕著な集客や産業振興にはつながらないが、継続し認知を深めることが重要と考えており、来年度は認知を高める広報活動を展開する計画である。</p> <p>学校利用はプラネタリウムでの理科（星の動き）の学習投影が中心となっているが、展示室にも目を向けさせ、科学リテラシーと地域リテラシーのバランスの取れた学習利用を進行していきたい。</p> <p>運営連絡協議会は来年度も地域の農と食をテーマとし、メンバーもほぼ継続して活動してくれることになったので、より具体的な成果を出していきたいと考えている。</p> <p>昨年の秋の企画展「北多摩の食と農 ～今晚何食べる～」から始まった圏域農家との連携が、顔が見える関係となり、徐々に実を結びつつある。じっくり具体化していきたい。</p>	A	A	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>「市民感謝ウィーク」を実施し、行政との連携も始まった点や圏域の未利用者への来館動機を高める工夫を行った点、さらにシャトルバス運行によりアクセスの改善を図った点を高く評価する。</p> <p>また、「学習利用の手引き」や「ロクトニュース」のリニューアルは時機を得たもので、選択と集中による広報物の合理化を図る取り組みも評価できる。</p> <p>声かけアンケートとチケット販売時の年齢把握などをデータ化し、それをもとに企画を考えるなどマーケティングの流れが定つきつつある点も評価したい。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>学校利用の促進を図るため、教員への働きかけを継続して行うとともに、新小学1年生のみではなく新中学1年生への招待券配布を検討するなど新たな顧客にアプローチするルート開発に取り組みされることを望む。</p> <p>また、潜在ニーズを掘り起こすマーケティングの方法についても積極的に取り組み、さらなる利用促進につながるよう、充実した事業展開を図ってほしい。</p>
R1	<p>地域拠点事業-2でも記載したが、「市民感謝ウィーク」は、「圏域市ウィーク」と名前を変え地域の価値・魅力を伝える事業としての側面が強くなったため、今後結果・成果は③地域拠点事業-2での記載に変更。</p> <p>運営連絡協議会は昨年から引き続き「北多摩の農と食」をテーマに先に記載した「圏域市ウィーク」との連携で実施したイベントの他にも多くの案が生まれ大きな成果が得られた。</p> <p>広報活動では紙媒体による周知が有効であることから、ロクトニュースは年6回発行としたことが、第3四半期後半までは過去最多の利用者数を更新できそうな状況となったことの一つの要因とみている。</p> <p>その他、チラシ等も19種発行しており、そのほとんどが内部スタッフによるデザインで発生費用を極力抑えたくらうで効果を上げる取り組みをしている。</p> <p>また、先に記載している文化庁助成金事業でのパンフレットの多国語化ややさしい日本語によるWEBページの開設、報告書の発行も行った。</p>	<p>多摩六都科学館としてソーシャル・インクルージョンを一つの理念として活動しており、文化庁助成金事業「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト」もその一環であり、今後の運営連絡協議会でもテーマをソーシャル・インクルージョンとして活動を開始する。</p> <p>また、現在のメンバーシップ制度を、賛助会といった方向への転換を図っていきたい。</p> <p>しかしながら、新型コロナウイルスの影響で、ロクトニュースの5・6月号と7・8月号が発行中止となる等、今後の具体的な活動に関しては現時点では見通しが立っていないが、8月までに方向性を入館者数の動向を定め『新常态SI型広報』をめざす。SI=ソーシャル・インクルージョン</p>	A	A	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>圏域市ウィーク、広報活動や紙媒体の充実などマーケティング面で進展が見られる。</p> <p>また、文化庁助成事業による多文化共生推進プログラムにおけるパンフレットの多言語化や「やさしい日本語」によるwebページの開設や報告書の発行に見られる取り組みを評価する。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>今後は中学校など未開拓の領域の開拓に注力することを望む。</p> <p>また、学校の利用促進は来館という形態だけでなく、「トランクの貸出プログラム」のような使いたい時に使える、自分たちのペースで活用でき、その後の来館意識を喚起できるような科学館の活用方法の可能性について検討し、提案につなげることを望む。</p> <p>ソーシャル・インクルージョンの点では、まだまだ様々な取り組みることや、取り組むべきことがあり、今後の取り組みに期待する。</p>

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	中期3カ年の取組結果・成果	現状の課題・次期3カ年の取組方針	目標の達成状況	評定	総評（総括的な意見等）
中期 3カ年 H29～ R1	<p>「市民感謝ウィーク」を「圏域市ウィーク」と名前を変え、地域の価値・魅力を伝える事業として圏域内で定着しつつある。また地域との密着度を高めた運営連絡協議会のテーマを「北多摩の農と食」とし「圏域市ウィーク」との連携で実施することで相乗効果を上げた。地域づくりのマーケティングにつながった事例となっている。</p> <p>広報活動では、市報をはじめとする紙媒体による周知が有効であることがわかり、イベントに合わせたロクトニュースの発行を年6回発行とした。これが第3四半期後半までは過去最多の利用者数を更新を可能とする状況を生んだ。</p> <p>その他、チラシ等も19種発行しており、イベントの企画と並行する形で内部スタッフによるデザインが、訴求力のアップと最小コストでの広報・マーケティングにつながっている。</p> <p>また、先に記載している文化庁助成金事業でのパンフレットの多言語化や「やさしい日本語」によるWEBページの開設、報告書の発行も行った。</p>	<p>運営連絡協議会の市民メンバーからの意見の中に</p> <ol style="list-style-type: none"> 『科学館がこのような取り組みをする』 『科学館がこんなに面白いところであったことを知らなかった』というのがあった。 <p>メインターゲット向けのマーケティングとは別に、長期的な観点から「地域参画力」のある中心人物（ハブとなる人）を戦略的に育成していくことの重要性を感じている。具体的には、学校教育、自然保護団体、地元農食の従事者が中心となっている。</p> <p>これらの取り組みは、社会とのよりよい関係づくり＝パブリック・リレーションズと認識している。市民が愛着の持てる六都地域であってこそ、「愛着の持てるロクトへ」（事業目標-4）が実現すると考えている。</p>	A+	A	<p>中期3カ年事業の成果に対する評価</p> <p>「圏域市ウィーク」が地域の価値・魅力を伝える事業として圏域内で定着しつつあることは、地域づくりのマーケティングとして高く評価する。</p> <p>市報やロクトニュースなどの紙媒体により有効な周知が行われ、イベントとつながったロクトニュース(年6回)の発行が数年にわたり、前年度の利用者を更新する原動力となった。広報活動の継続的な効果分析により、有効な媒体を自覚的に使ったことに加え、文化庁助成金事業を活用して多言語化や「やさしい日本語」に配慮した広報を実践し、ソーシャル・インクルージョンの取り組みを進めたことも評価できる。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>今後は未開拓のセグメントの開拓に取り組むことを期待する。</p> <p>また「未・非来館者層」との関係性を構築し、アクセスを設計するマーケティングを進めてほしい。</p> <p>次期の活動にも期待を込めて、A+に近いAとする。</p>

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総括的な意見等）
H29	<p>第1期の指定管理運営開始以降、ロボットパークを除く企画展は、すべて館スタッフで企画・設計・製作を行っており、館スタッフの企画力や業務に対する意識は飛躍的向上を見せている。</p> <p>2020年度から小学校でのプログラミング教育が始まるため、科学館として今後プログラミングに関する教室は必須と考えており、プログラミング教室開催用機材を揃えた。</p> <p>2020年度に向け、より利用者サービスの向上(特にアウトリーチの充実など)を図るため、天文グループの人員増を含め常勤スタッフを3人増員する。</p>	<p>集客の両輪であるプラネタリウムの生解説とラボでの実感を伴った体験(観察・実験・工作)について、再度各スタッフ一人一人のスキルの棚卸を実施し自己スキルの魅力を確認の上、さらなるレベルアップをめざす。具体的にはアクティブラーニングの思想＝主体的・対話的で深い学びがあり、これまでの経過の中でかなりのレベルで達成されていることを個々が認識することがベースになる。</p> <p>日曜日などは利用者数は館の物理的限界に近くっており、これ以上の利用者数の大幅増は見込めず、利用料金収入の伸びが頭打ちとなることから予想される中で人件費が増えることになるが、平日や土曜の来館者増の施策を取ると共に、業務の効率化による残業の削減を進めていく。</p>	A	A+	<p>プログラミング教室開催用機材を拡充したり、利用者サービスの向上に向けてスタッフを増員したりと、事業予算の枠組みの中、最大限の努力に努めていると思う。</p> <p>また、企画展を自前で実施し、自己研鑽プログラムの充実などにより、スタッフの力は確実に向上している。引き続き能力向上プログラムを充実させ、体制の強化につなげてほしい。</p> <p>スタッフの企画力ならびに業務に対する意識の向上は大いに評価できる。</p>
H30	<p>第1期の指定管理運営開始（2012年度）以降、内製の企画展により、スタッフのスキルアップと効率的な経営を実現できている。結果プログラミング学習用機材の確保などの投資が可能になり、圏域ニーズに応えることが実現している。</p> <p>これはプラネタリウムでも同様で、生解説のコンテンツ内作によってタイムリーな企画展開で集客力を維持できている。</p> <p>長年の懸案であった助成金の獲得や外部資金の導入に関しては、平成31年度文化芸術振興費補助金「地域と協働した博物館創造活動支援事業」に「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト」で応募し採択された。</p>	<p>プラネタリウムの生解説とラボでの実感を伴った体験について、各スタッフ一人一人のスキルの自己点検を実施し、常設展示と自己スキルの魅力を確認の上、コンテンツの充実をめざす。具体的には「アクティブラーニングの思想」＝「主体的かつ対話的で深い学び」を基本に再認識することがベースとなる。</p> <p>これ以上の大幅な利用者数の増加が見込めない状況で、スタッフが安心して働ける環境を整えるには、業務の効率化だけではなく収益構造の改革も必要であり、企画展コンテンツやプラネタリウム番組の他館利用や自主事業の拡大などで収益を上げることなどの検討を開始する。</p> <p>オリンピックやコンビニエンスストアなど人手不足が深刻であるなか、優秀な人材の確保のため処遇改善を検討する。</p>	A	A	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>安定した来館者数を確保していることに加え、助成金や補助金といった外部資金の獲得に積極的に取り組んでいることを評価する。</p> <p>限られた経営資源を最大限有効に活用することが重要であり、スタッフ一人一人の能力向上やプログラミング教室の機材に投下することは効果的である。今後も総花的ではなく、効果の高いものに集中してほしい。</p> <p>また、スタッフのレベルアップにより企画展やプラネタリウム番組の内製化が進み、経費削減と共にタイムリーな企画展開が可能になった組織力を高く評価する。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>業務の効率化と収益構造の改革、自主事業の拡大などを進め、今後流動的になると予想される人材の獲得・確保に注力することを期待したい。</p> <p>他機関との連携によるコンテンツ開発・人材育成は、市民モニターによる定性評価においても高い評価を得ているが、さらなる連携強化に取り組んでほしい。</p>
R1	<p>毎年記載している事ではあるが、企画展を始め教室やワークショップ・イベント等はほとんどが内製で、費用の削減やスタッフのスキル向上につながっている。</p> <p>昨年度の課題で記した「収益構造の改革」して、乃村工藝社PPP全体として、企画展やワークショップのアイデアやノウハウの共有は少しずつ進んでいる。</p> <p>先にも記載しているが、文化庁助成金事業の「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト」の継続が今年度の倍以上の金額で採択されている。</p> <p>自主事業のショップ販売は、企画展との連携や常に売れ筋情報取得とそのデータ分析等により、売上を増やしており、プラネタリウムでのコンサート等のイベント回数も大きく増やすことができている。</p>	<p>4月・5月の臨時休館や、開館以降も滞留者数制限・プラネタリウムの観覧者数制限・人を集めるイベントの中止等により利用者数が大幅に減少することは確実であり、さらに新型コロナウイルス感染拡大防止の為にマスク・消毒剤他の購入費用が相当額発生することから、令和2年度は厳しい運営が余儀なくされる。</p> <p>しかしながら、コロナ収束後に向けスタッフの雇用は確保しコミュニケーションと専門性のスキルアップを継続すると共に、ようやく進み始めた乃村工藝社PPP全体としての各館との連携や人材の交流による経営効率化を本社と協力しながらさらに進める。</p> <p>また、いま最も懸念されるのが、今年度の利用者数の大幅減少により、コロナ収束後の利用者離れが起こることであり、その対策を今後検討・実施していく。</p>	A	A	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>企画展、教室、ワークショップ、イベント等のほとんどを内製で行うことにより、スタッフのスキルの上昇や費用の削減に貢献している点を評価する。</p> <p>また、複数年にわたる外部資金の獲得による新規事業推進、自主事業のショップ販売、プラネタリウムのイベント利用促進等に見られる収益構造改革ならびに継続的かつ挑戦的な取り組みを高く評価したい。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>スタッフの研修体制の整備等においては今後さらなる充実を目指してほしい。</p>

自己評価			外部評価	
中期3カ年の取組結果・成果	現状の課題・次期3カ年の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
<p>中期3カ年 H29～R1</p> <p>指定管理者制度スタート以来、企画展を始め教室やワークショップ・イベント等はほとんどが内製で、費用の削減やスタッフの企画・コミュニケーションスキル向上に確実につながっており、持続性を担保する運営を可能としている。</p> <p>また、集客力のあるかつ常設への活用を意識した内製の企画展事業推進方式は完全に定着し、着実に成果を上げてきた。これは参加性を徹底的に追及するか地域づくりにつながる企画の振り分けを長期計画的に組んだことによる。</p> <p>指定管理者制度初年度より、環境保全や地域産業・防災など地域づくりを核とした企画を立て、遠隔地への遠征も含めた大胆な体験学習を実現してきた。今後もこの方針で科学館体験と異なる異次元体験を実施する。</p> <p>多摩・島しょ広域連携活動助成金などの公的助成金により、新たなプログラムの開発に取り組む予定である。</p>	<p>今後も以下を継続・推進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●乃村工藝社PPP事業部全体として、企画展やワークショップのアイデアやノウハウの共有に関して、事務的手続きをシステム化し、より拡大していく。 ●新規取り組みとしての文化庁助成金事業の「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生推進プロジェクト」の継続が今年度の倍以上の金額で採択され、博物館相当施設の指定と合わせ、博物館業界で注目を集めている。今後のソーシャル・インクルージョンの大きな核事業となるよう展開していく。 ●自主事業のショップ販売は、企画展との連携や常に売れ筋情報取得とそのデータ分析等により、売上を増やしており、プラネタリウムでのコンサート等のイベント回数も大きく増やすことができている。またキャッシュレスを令和2年7月より採用する。 ●今後の重要課題は、新型コロナウイルスとどう向き合うかである。利用者の減少は避けられない状況で、デジタル化により科学館に来なくても科学館体験ができる体制の構築は重要ではあるが、いかに収益に結び付けるかを考えていく必要がある。 	<p>A+</p>	<p>A</p>	<p>中期3カ年事業の成果に対する評価</p> <p>展示を含めた館内での実施プログラムの多くを内製で行い、指定管理者全体での知・経験の共有により、費用削減やスタッフの能力向上を図った点や、新規取り組みとして文化庁の助成金を獲得して実施した多文化共生プロジェクトの成果が認められ、令和2年度助成金が倍増となったことを高く評価する。</p> <p>このような公的助成金（多摩・島しょ広域連携活動助成金、文化庁の助成事業など）の活用は財政計画上、あるいは職員のモチベーション向上にも寄与するものと考える。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>指定管理者の企業力を活かした人材育成に今後も期待する。自主事業の改善や既存の資源（プラネタリウム、カフェ）の活用は成果をあげつつあるので、今後のさらなる展開を検討していくことが課題である。</p> <p>また、ウィズコロナを視野に入れ、ショップのキャッシュレス化や各種サービスのオンライン化の拡張にも期待したい。</p>

1. 事業目標ならびに事業方針 (科学館事業 2頁参照)

2. 中期の重点戦略ならびに業績指標

3. 評価結果・指標の実績結果

赤字：新規の指標あるいは「ローリングプラン2016」で改訂された箇所 セル黄色：市民モニター関連 評価結果欄の斜め線：調査未あるいは定性評価として実施

事業領域	重点戦略	業績指標	定量	検証方法	中期目標 (目)	前中期			今中期			中期3カ月	H28調査	
						H26	H27	H28	H29	H30	R1			実測値
科学館事業 (中核事業) 多様な学びの場の創出	● 専門性とエンジョイメントを基本とし見通しを持った体験による実感を伴った理解とコミュニケーションを重視した、探求的で主体的な学びとなる事業を行います。	● 乃村												
		● ソーシャル・インクルージョンに基づき、誰もが分け隔てなく参加して楽しめるよう、子どもだけでなく、高齢者も障がいのある方も、すべての人々がともに楽しみながら学べる場と機会の創造に努めます。	● ソーシャル・インクルージョンに基づく活動への取組	B	検討/実施					実施	実施	実施		
	● ソーシャル・インクルージョンに基づく活動への取組	D						B	A	A				
	● 展示や教育普及活動がさらに充実するよう、科学館事業の基盤となる収集・保存・調査研究活動の強化を図ります。特に東京の自然史(地域資源)を重要テーマと位置づけます。	● 乃村												
	● 多様なテーマ(健康・食・芸術など)を科学的なアプローチで探求し、科学に興味のない方でも来てみたいと思わせる事業展開を図ります。様々な利用者層に合わせたプログラムで、科学への興味を引き出す場をつくりだします。	● 科学への興味喚起度(市民モニターが検証・定性的)	D		検討	A+	A+	A+	A+	A+	A+			
	● 行政への働きかけや体制整備に向けての取組(削除)	B	検討/実施											
	● 館内だけでなく、地域全体にも活動フィールドを拡げ、多くの方々が科学の楽しさを体験できるよう、アウトリーチ活動を推進します。特に来館しづらい環境にある学校に対してアウトリーチ活動を行っています。	● 乃村 業務基準書改訂に向けた検証(削除)	B	検討/実施										
	● 市民や機関と連携を図り、圏域内に科学教育の場が広がっていくことも視野に入れて事業展開を図ります。	● 圏域内でのアウトリーチ活動の推進	B	検討/実施					実施	実施	実施			
	中期的な指標	■ 「誰もが科学を楽しめる科学館」としての評価(定量)(削除)	*	E									5.49	
		■ 「誰もが科学を楽しめる科学館」としての評価(定性)(削除)		F									A	
		■ 圏域市民の科学リテラシーの向上(科学への興味喚起度)(定量)	*	E									4.99	
		■ 指標：生活の中で役立つ科学の知識が身につく、世界の課題を科学的な観点から考えることができる科学館		F									A	A
		■ 圏域市民の科学リテラシーの向上(科学への興味喚起度)(定性)		F									A+	A+
■ 科学の担い手の育成(定性)		F												
■ 継続的なユーザーの評価(元ジュニアボランティア、友の会)		G												
■ 「科学館での体験を通して、考え方や生き方に変化が生まれたか」そのような事業を行っているか(定性)		F										A+	A+	

平均値：4.94

1. 事業目標ならびに事業方針 (地域拠点事業 5頁、8頁参照)

2. 中期の重点戦略ならびに業績指標

3. 評価結果・指標の実績結果

赤字：新規の指標あるいは「ローリングプラン2016」で改訂された箇所 セル黄色：市民モニター関連 評価結果欄の斜め線：調査未あるいは定性評価として実施

事業領域	重点戦略	業績指標	定量	検証方法	中期目標 (目)	前中期			今中期			中期3カ年 実測値	H28調査 参考値		
						H26 実測値	H27 実測値	H28 実測値	H29 実測値	H30 実測値	R1 実測値				
地域拠点事業 多摩六都の 交流拠点	● 地域の人々が立場を変えつつも人生を通して、科学館ボランティアや友の会等の自主的な活動によって成長し、社会貢献し、自己実現できるよう支援活動を行います。 ● 圏域市民の生涯学習に対する支援の拡充を図ります。科学館内だけでなく、地域との連携を図り、生涯学習の場と機会をつくり、コンテンツの提供を図ります。 ● 場づくりだけでなく、地域の多様な主体がつながるためのきっかけづくりや関係を深めるための交流事業を行います。 ● コミュニティカフェを科学館に導入 (平成29年3月17日事業開始)。新たな地域コミュニティの交流の場・市民の社会参画の場として事業展開を図ります。 ● 科学館をもっと気軽に利用してもらえるよう、無料ゾーン・有料ゾーンの設定を変更し、無料ゾーンの充実を図ります。	● 事業評価における市民モニターの導入実施 (マーケに移動)		B	検討/実施										
		■ ボランティア活動の成果を発信		B	検討/実施					実施	実施	実施			
		貸出の需要、ルールなどの検討 (削除)		B	検討/実施		検討	検討							
		● 市民活動支援事業		D						A	A	A			
		● 生涯学習に係わる事業への取組		D						A	A	A			
		● 地域づくりのための交流事業の実施		D						B	B	A			
		● 中期の指標あるいは定性指標：コミュニティカフェの導入によって、新たな地域コミュニティの交流・社会参画の場として機能しているか		D	中期の指標に変更★										
		施設構成および改修計画の検討 (削除)		B	検討/実施										
		生涯学習施設としての評価 指標：各世代にわたって生涯学習の推進に貢献できる科学館	*	E											4.57
		地域の交流拠点としての評価 指標：地域の人々が世代を超えて交流できる科学館	*	E											4.46
「多くの圏域市民が参加し盛り上げていける科学館」としての評価	*	E											4.17		
■ ボランティアの満足度 →組合が中期的に検証	*	H													
■ ボランティアの自己実現度・社会貢献度	*	H													
■ コミュニティカフェとしての実現度・有効性	F	中期に変更										A			
■ 「多くの圏域市民が参加し盛り上げていける科学館」としての評価	F											A	A		
多摩六都の 魅力発信	● 地域の自然・文化・歴史・産業など様々な資源を、地域の皆さんと協力しながら、科学的な観点から価値づけ、その価値を広く発信していく活動を行います。 ● 「地域づくり」の第一歩として、地域資源と圏域市民を「つなぐ・めぐる・知る」ための事業を行います。例えば、食・農・健康をテーマにしたローカルツアーや研究所や地元企業の見学会などが考えられます。 ● こうした活動を通して、地域の人々の「地域参画力」を高めていきます。 ● 長期的・間接的な効果として、科学の担い手の育成、地域産業の活性化も展望として掲げ、事業の展開を図ります。 ● 地域の学術機関や地域産業との連携を深め、協働で多摩六都圏域の特徴を基にした「地域づくり」事業の推進を図ります。 ● 多摩六都圏域だけでなく、多摩地域全体にも視野を広げ、気づかずに見過ごしている資源(地域づくりを実践できる創造的な人材やソフトも含む)の掘り起こしを行い、共有できるしくみを整備します。(中期的な取組→中期的な指標) ● 長期的・間接的な効果として、科学の担い手の育成、新たな産業創出も展望として掲げ、事業の展開を図ります。(中期的な取組→中期的な指標)	● 多摩地域の価値を見出せる事業の実施 (定性)		D		検討	A	A	A+	A	A				
		協働体制の整備 (削除)		B	検討/実施										
		データベース整備に関する検討 (削除)		B	検討/実施										
		● 圏域市民を対象とした地域づくりに関するプログラムの実施		B	検討/実施					実施	実施	実施			
		● 長期的な観点を持って取組		B	検討/実施					実施	実施	実施			
		業務基準書の改訂 (削除)		B	検討/実施										
■ 「地域の振興に寄与できる科学館」としての評価 (定量)	*	E											4.9		
■ 「地域の振興に寄与できる科学館」としての評価 (定性)	F											A	A		
■ 「地域資源を生かした運営」に対する評価 指標：地域の資源 (自然・文化・ひと等) を生かした運営を実践する科学館	*	E											4.94		

平均値：4.94

4. 評価結果（定性評価）

自己評価			外部評価		
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総合的な意見等）
H29	市民モニターの活動は、継続的な視点で定性的な評価を得るのみならず、圏域市民と運営者が直接意見や情報の交換を行う場を作りだし、相互理解に寄与している。 圏域内のサテライトや施設貸出しの課題については、構成市の公共施設管理計画の動向も参照しつつ、施設の基本構想や設置理念との整合性を考慮して実現性について再検討したい。	市民モニターの継続が難しい方もいるので、新たなメンバーの募集が課題。 圏域内のサテライトや施設貸出しを検討する際には、使用料の収受が可能か、それにより実効性の高い収支が図れるかなど、経済性の観点から困難が指摘されている。 地域のニーズに合わせていくには、アウトリーチ活動（出張事業など）に注力した方が持続的な活動とすることができるものと思われる。	A	A	市民モニターの意見聴取は、科学館の事業推進や評価活動においても非常に重要なので今後も継続してほしいが、科学館が取り組んでいる市民モニター制度に対する圏域市民の認知度が低いように感じる。この点を改善できるよう努力が必要。また、市民モニター活動の中にこれからの科学館を支える若者層（大学生・高校生）をもっと巻き込んでいくべきだと思う。 ソーシャル・インクルージョンに関する取り組みは、圏域のさまざまな主体と協力しながら、地域にある課題を研究し、ターゲットを明確にした上で具体的な策を検討していただきたい。
H30	地域資源の価値発信機能の強化を図るため、今年度より圏域構成五市ごとの「市民感謝ウィーク」を実施した。この活動を通して、従来の「圏域市民感謝デー」における地域の産業の価値発信に加えて、自然、文化、歴史などの地域資源についても新たに各市との連携により圏域内外に対して圏域の魅力発信することができた。 「圏域市民感謝デー」の実施などを通じて、市民をつなぐハブとしての科学館事業の取り組みを実施している。	圏域構成市ごとの「市民感謝ウィーク」を5月から1月までの奇数月に実施したため、対象圏域市民の利用に際して若干季節的な影響を受ける時期も見受けられた。実施時期については、地域資源の適切な発信時期も踏まえて、より効果的な事業に発展するよう指定管理者とともに取り組んでいきたい。 継続的に実施している「市民感謝デー」については、地域の産業を後押しし、圏域を盛り上げる事業として定着しているが、組合と指定管理者との連携体制や指定管理料中の当該予算の規模についての課題がある。	A	A	今年度事業の成果に対する評価 従来の「市民感謝デー」に加え、圏域五市ごとの「市民感謝ウィーク」を実施したことにより、圏域市民の利用促進と情報発信を強化し、さらに圏域との連携を強め、自分たちの科学館という意識を市民間に醸成できていることを評価したい。 今後の課題・今後への期待 「市民感謝デー」は地域のイベントとして定着しつつも、さらなる来場者増加を望むことは難しいので、今後は内容の工夫をする必要性を感じる。また「市民感謝ウィーク」については、今後は地域の特性や季節的な要因についても考慮し、より効果的な取り組みとなるよう定着させる工夫をしてほしい。 生涯学習プログラムは市民モニターによる定性評価で高評価ではあるが、幅広い年代に向けた学習機会の実施と周知の方法についてさらに検討を加え、今後も力を入れて取り組んでほしい。 ソーシャル・インクルージョンの試みについては、少しずつ進展している点は良いことであるが、今後はアウトリーチ活動の充実も含めてソーシャル・インクルージョンの考え方を実質化することを最優先課題として取り組んでほしい。
R1	ソーシャル・インクルージョンについて、在住外国人をターゲットとした多文化共生推進プロジェクトを指定管理者とともに立ち上げ、文化庁の助成金を主な財源として、国内の博物館への多文化共生に関するアンケート調査や先進施設へのヒアリング調査、圏域在住外国人向けの特別講座（やさしい日本語でプラネタリウムを楽しもう等）を実施した。 科学館へのアクセスが不便な地域を重点的に、圏域公共施設（図書館等）と連携したアウトリーチを実施するなど、市民サービスの充実を図るとともに、生涯学習拠点として圏域の地域づくりに活かすことができるよう取り組んだ。 圏域5市ごとの「圏域市ウィーク」を継続して実施した。 新たな地域資源の価値発信につなげられるよう企画段階より指定管理者と連携を密にし、圏域の各種イベントに積極的に出向くことなどの事前調査を通じて、当該プログラムの魅力向上に積極的に取り組み、昨年度以上の利用者数となる成果を上げることができた。	多文化共生事業の本格実施は、令和2年度からとなるが、主な財源は文化庁の助成金であるため、助成金交付期間（5年間）の終了までに本事業が軌道に乗るよう今後も計画的に取り組んでいきたい。 圏域市民の期待に最大限応えるため、アウトリーチ活動と館内事業活動との充実の両立が図られるよう限られた経営資源（ヒト）の最適配分を指定管理者とともに創意工夫をしながら実現していきたい。	A	A	今年度事業の成果に対する評価 ソーシャル・インクルージョンの一環として指定管理者と協働しスタップを配置するといった姿勢、文化庁助成事業の多文化共生プロジェクトの取り組みが始まっている点を評価する。 これは、館の今後の方向を探る有意義な取り組みとなるだろう。 科学館へのアクセスのよくない地域では、図書館などの公共施設と連携しアウトリーチ活動を推進していることや、地域の拠点として機能し、多数の利用者を獲得していることも高く評価したい。 今後の課題・今後への期待 多文化共生、ソーシャル・インクルージョンの観点から、圏域在住外国人の来館者数についての情報収集を指定管理者と進めていく必要がある。 また、圏域在住外国人向けの「やさしい日本語でプラネタリウム」の実施等もあるが、他のソーシャル・インクルージョンの取り組み、コミュニティカフェのさらなる活用など今後の事業に期待したい。

4. 評価結果（定性評価）

自己評価		外部評価	
中期3カ年の取組結果・成果	現状の課題・次期3カ年の取組方針	目標の達成状況	総評（総合的な意見等）
<p>中期3カ年 H29～ R1</p> <p>科学館事業（中核事業）「多様な学びの場の創出」 「ローリングプラン2016」にて今期からソーシャル・インクルージョンへの取り組みが新たに加わったことを受けて、ハード及びソフト面からの整備に取り組んだ。 ハード面では、築20年以上経過している施設の老朽化に伴う衛生設備改修の際に、トイレ洗面台の高さや、洗面台の自動水栓化、エアタオルの導入などできる所からの環境整備を行った。 ソフト面では、文化庁の助成金を主な財源として、指定管理者と実行委員会形式にて「やさしい日本語」を使用したプログラム開発など圏域の実情に適した取り組みを始めることができた。外部資金を導入した形で本事業の取り組みを継続して行えることは非常に大きな成果であると考えている。 東京の自然史をテーマとした地学、生物標本資料の調査研究、収集保存活動では、博物館法の適用を受ける博物館相当施設の指定に向けて、指定管理者と連携して標本リストの作成等の必要な準備作業を行い、東京都へ申請書類を提出することができた。今期中の指定とはならなかったが、指定されるとなると、当館での教育普及活動とともに、圏域市民から寄贈標本を受け入れる際により社会的信用力が高まることにつながる。科学館へのアクセスが不便な地域を重点的に、図書館等の圏域公共施設と連携したアウトリーチを実施し、多様な学びの場の機会づくりに積極的に取り組み、今期中、新規施設との連携も実現でき、成果をあげることができた。</p> <p>地域拠点事業1「多摩六都の交流拠点」 地域拠点事業2「多摩六都の魅力発信」 圏域住民の交流、及び圏域資源の魅力発信の場として実施してきた「圏域市民感謝デー」に加え、今中期からは圏域構成5市ごとの「圏域市ウィーク」を実施した。本イベントの利用者数は、平成30年度の約1,700人に比べて、令和元年度は約2,000人となり確実に成果を上げている。また、はじめて利用者数についても同様の結果が出ており、圏域市民の「地域参画力」の向上に寄与している。</p>	<p>ソーシャル・インクルージョンへの取り組みについては、各地域ごとに実情が異なるため、これからも圏域の実情をよく調査研究したうえで、的確な課題解決につながるよう取り組む必要がある。また、文化庁の助成期間が令和5年度までであることから、次期3カ年では本取り組みが軌道に乗るよう指定管理者と連携して計画的に実施していきたい。 博物館相当施設の指定については、指定された後はより一層の展示及び教育普及活動の充実につながるよう、指定管理者と連携して引き続き既存資料の登録作業を進めるとともに、必要な学術書や備品類などの整備を予算の裏付けと合わせて考えていきたい。 アウトリーチについては、圏域市民の多様な学びの場の創出に向けて、館内事業活動の充実との両立を図りながら、限られた経営資源（ヒト）の最適配分を指定管理者とともに検討していく。</p>	<p style="text-align: center;">A</p>	<p>中期3カ年事業の成果に対する評価 中期3カ年において指定管理者と緊密に連携して、文化庁の助成金を獲得し、ソーシャル・インクルージョンを掲げた取り組みを開始したことや、博物館相当施設の指定に向けた申請業務を完了するなど表には見えにくい部分で着実に成果を上げたことを高く評価する。 ソーシャル・インクルージョンについては、今期から「ローリングプラン2016」に加わったことから、ハード面（施設老朽化対応）、ソフト面（文化庁助成事業）の取り組みで良い成果が上がっている点を高く評価する。 科学館へのアクセスが不便な地域に向けて重点的にアウトリーチ活動を実施し、多様な学びの場づくりに成果を上げたことも評価できる。</p> <p>今後の課題・今後への期待 今後は幅広い世代の参加や生涯学習への取り組みに注力し、地域の人々のニーズに応えていくことが一層求められる。 地域の科学的拠点として、東京の自然史をテーマとした地学、生物標本資料の保存調査、展示等の活用は、今後の博物館相当施設の指定へつながり、市民のコレクションなど貴重な標本の散逸を防ぐことを期待する。 地域のハブとして機能する博物館として、科学館が保有する資源の適切な配分と活用をさらに計画的に実施してほしい。</p> <p style="text-align: center;">A</p>

1. 事業目標ならびに事業方針 (11頁、14頁参照)

2. 中期の重点戦略ならびに業績指標

3. 評価結果・指標の実績結果

赤字：新規の指標あるいは「ローリングプラン2016」で改訂された箇所 セル黄色：市民モニター関連 評価結果欄の斜め線：調査未あるいは定性評価として実施

事業領域	重点戦略	業績指標	定量	検証方法	中期目標 (目)	前中期			今中期			中期3カ年 実測値	H28調査 参考値
						H26 実測値	H27 実測値	H28 実測値	H29 実測値	H30 実測値	R1 実測値		
マーケティング 愛着の持てる ロクトへ	● 利用状況やニーズを分析し、認知度・利用率・満足度を高める取組みを中長期の観点から推進します。利用者を第一に考え、常に質の高いサービスを提供します。	● 利用者の声を反映した改善を可能とするしくみ検討に関する取組 (削除)		B	検討/実施								
	● 市民や利用者の声を長期的に反映させるしくみ、ダイレクトに運営側に取り込めるしくみとして、市民モニター制度などの拡充を図ります。	● 市民モニター制度の実施 (移動)		B	検討/実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施		
	● 多摩六都科学館が圏域市民のために運営されている施設であることや今後の取組方針を周知し、理解者・賛同者を増やしていく活動を積極的に展開します。	● 科学館の取組周知活動の実施		B	検討/実施				実施	実施	実施		
	● これまで同様、利用者向けのマーケティング戦略も重視する一方、今後は未利用者向けや地域づくりに携わっている圏域市民向けの対応策も検討します。また、事業ターゲットを想定した圏域市民の年代別人口構成の分析なども行います。	● 未利用者への利用促進策の実施		D					B	A	A		
	● 広報については、エリア戦略とプロモーション戦略を検討し、効果を分析しつつ、有効かつ効率的な方法で展開します。	● 乃村 (POSデータ・地域性や年齢別に分析)											
	● 組合の主導のもとアクセスの利便性を高め、さらにアクセスの改善を図るために、バス運行の導入を検討します。	● 交通の便を改善し利用しやすい科学館への取組		B	検討/実施					実施	実施	実施	
	● 障がいのある方も、外国の方も、誰もが利用しやすいインクルーシブな (包括的な) ソフト・ハードの整備を図ります。	● 誰もが利用しやすい事業の実施 (定性評価) ● ソーシャル・インクルージョンの観点から		B	検討/実施					実施	実施	実施	
	● 館名のわかりやすさは、愛称やキャッチコピー、VI (ビジュアル・アイデンティティ) 等を導入し、コミュニケーション計画の改善を図ります。	● 将来展望の検討 (削除)		B	検討/実施								
		● 圏域市民の科学館の認知度	*	E									91.9%
		● 圏域市民の科学館の利用率 (全体・未認知者も含む)	*	E									67.2%
	● 圏域市民の利用時の満足度 (満足+どちらかと言えば満足の割合)	*	E									92.6%	
	■ 「自分の科学館/地域の科学館として価値ある存在」としての評価指標：ここ3年間の活動は、ご自分にとって、家族にとって、地域にとって価値あるものだったと思われませんか。	*	E									5.8	
	■ 「市民から愛される科学館」としての評価* 指標：自分の科学館・地域の科学館として市民から愛される科学館	*	E									5.48	
	■ 「交通の便を改善し利用しやすい科学館」としての評価	*	E									3.94	
	■ 「市民から愛される科学館」としての評価		F									A	
財政計画	● 今後、科学館の取り組むべき基本事業に地域拠点事業を加えることとします。	● 地域拠点事業推進状況のモニタリングならびに検証		B	検討/実施					実施	実施	実施	
体制整備	● 負担金・利用料金以外の外部資金の導入・活用策 (寄附金、助成金、補助金の確保の他、賛助組織など) を検討します。	● ネーミングライツの検討、圏域5市が共同で実施する助成事業の継続実施		B	検討/実施					実施	実施	実施	
しくみづくりを	● 地域連携・協働体制は、組合・指定管理者などそれぞれの立場で、共につくりあげていくしくみの強化を図っていきます。	● 乃村 人的ネットワーク充実に向けた取組 (試行後、削除) ● 人的ネットワーク充実に向けた取組 ● 人的ネットワーク充実に向けた取組 (試行後、削除)		B	検討/実施						実施	実施	実施
	● 施設・設備の老朽化対策と長寿命化を図るとともに、常に魅力的な施設であるために、展示やプラネタリウム等の定期的なリニューアルが実現できるよう財政計画を検討します	● 財政計画の検証・改訂 ● 施設の長寿命化計画の検証ならびに作成		B	検討/実施					実施	実施	実施	
	● 継続的なコンテンツ開発、優秀な人材の確保など、ソフト整備も長期的観点に立ち、財源確保を図ります。	● 他機関との連携によるコンテンツ開発・人材育成の実施		D						A+	A+	A+	
		■ 持続可能な財政計画・体制整備の推進 (定性的評価)		B									A+
	● 駐車場が不足しているなど施設に関する課題を解決するための取組みを行います。交通機関の協力や投資の必要もありますが、長期的な観点から改善策を検討します。	● 緑環境に配慮した駐車場の整備 (削除)		B	検討/実施								

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評定	総評（総合的な意見等）
H29	H28のはなバスの花小金井駅乗り入れにより、科学館へのバス利用便は大きく向上した。 ネーミングライツに関心を持つ事業者の調査として、組合指定金融機関の法人営業部担当者に依頼をしている。 財政計画の改定（平成30年度）に合わせて、長期修繕計画作成業務を平成30年度予算編成で計上し、実行性の高い施設の長寿命化に取り組む。	アクセス対策では、東久留米市と西東京市にまたがる都市計画道路の開通に伴い、科学館経由の路線の検討について路線バス運行会社と情報交換を行った。今後、具体的な検討にまで着手できるか、継続的な働きかけが必要である。 施設の維持補修経費に係る組合の財政状況が非常に厳しいことが大きな課題である。今後、構成市とも相談し、組合の財政を適正に保つよう努めていく。	A	A	駐車場整備、はなバスルート変更（花小金井駅への乗り入れ）が定着し、来館者数も24万人台を確保していることは高評価である。公共交通機関のアクセス改善は非常に大変なことで、継続的に取り組まないと実現できない。それを実現した点は大いに評価できる。また、さらなるアクセス改善に取り組んでいる姿勢も評価したい。 施設の老朽化対策は、現前の大きな課題である。組合は長期修繕計画策定を確実に進めていく必要があるが、施設の維持補修は組合だけでは実現できるものではない。引き続き、構成市の理解を得る努力を続けてほしい。 昨今では、正月休みにミュージアムが開館している事例も見られるようになった。多摩六都科学館でも、圏域市民の利用サービスの一環として正月休み期間中に1日でも開館できるか検討してほしい。
H30	市民モニター制度については、開催されている意見交換会が市民モニター・指定管理者・組合の三者が課題や改善策をその場で協議することによって迅速な業務改善への契機となっている。 「圏域市民感謝ウィーク」は、「圏域市民感謝デー」同様に各市の主要駅より休日のみシャトルバスを運行し、圏域市民の交通アクセスの改善に指定管理者と協力して取り組んだ。 ネーミングライツについては、昨年度依頼していたことが進展し、民間事業者1社と面談を行うまでに至った。 財政計画については、平成31年度からの新たな計画期間のものを策定し、施設の老朽化に係る大型空調設備の更新（令和6年度予定）に対応するものとなっている。	現在の組合財政の厳しい状況などを構成市にご理解いただき、平成31年度より構成市負担金を増額させていただくことができた。前回の財政計画の運用において、計画期間中における歳出及び基金残高実績が大幅に乖離してしまったことを反省して、今後は財政規律の確保に努めていく。 これからも施設の老朽化が加速度的に進行することを考慮すると、より多くの財政出動が強いられることが予測されることからネーミングライツなどの外部資金調達も含めて、自主財源の確保に係る制度確立に向けた準備を進めていく。	A	A	今年度事業の成果に対する評価 構成市の負担金を増額できたことは大きな成果であり、これは設備の老朽化対策の必要性に加え、科学館の活動の成果が構成市に認められたものといえよう。また、市民モニターの活用が組織的・継続的に行われ、進展してきている点は評価したい。 今後の課題・今後への期待 中長期的な施設の老朽化対策は大きな課題だが、指定管理者の協力を得ながら計画を進めてほしい。また、ネーミングライツの検討にあたっては、来館者や未利用者を含めた広範囲の意見を聞いた上で進めるべきだと思う。 市民感謝デー等に見られるシャトルバス運行は、アクセスの改善とともに利用機会の提供として重要である。引き続き、アクセス改善に取り組んでほしい。 市民モニターから出ている意見に対しては、取り組むべき課題の優先度を見極めた上で改善につなげてほしい。
R1	市民モニターの活動は、意見交換会等を通じて、科学館の様々な事業活動に対する継続的な視点による定性的な評価を得るとともに、市民の声を運営改善や市民サービスの向上に反映させることができている。 今年度は、「地域づくり」や「ソーシャル・インクルージョン」について関わりの深い圏域5市の市民9名に、これまでの中期3カ年の取り組みや方向性について検証していただくとともに、長期的な視点を持って地域の科学館として取り組むべき課題等を検討する機会を得ることができた。 外部資金の導入では、文化庁の助成金を活用し、指定管理者と連携して在住外国人向けサービスを促進することができた。	今年度の市民モニターの改選では、圏域全市からの構成とはならなかったため、令和2年度以降は圏域全体の地域の実情が把握できるよう改善を図ってきたい。 構成市の財政状況が厳しさを増す中、経営上の重要課題である施設の老朽化対策については、今後も圏域市民にとって魅力的な施設であり続けるため、クラウド・ファンディングなどの外部資金を新たな自主財源として獲得できるよう先進事例などを研究し、導入可能性について検討してきたい。	A	A	今年度事業の成果に対する評価 市民モニター活動や定性的な中期事業評価調査といった客観的な館の評価を継続して実施し、次年度計画に活かすなどPDCAが出来上がっている点を評価する。 また、運営や市民サービスの改善に反映させている点も評価できる。 今後の課題・今後への期待 市民モニターの方々の年齢・性別構成にやや偏りがあると思われるので、できるだけ偏りがないようにしてほしい。 今後は、特に10代（中学生）の意見を収集する意味で、ジュニアボランティアやジュニアボランティアOBOGなどにもぜひ意見を聞き、計画に取り込んでいただきたい。 また、2016年度に実施した未利用者の意見聴取も今後検討してほしい。

4. 評価結果（定性評価）

自己評価				外部評価	
	中期3カ年の取組結果・成果	現状の課題・次期3カ年の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総括的な意見等）
中期 3カ年 H29～ R1	<p>マーケティング「愛着の持てるロクトへ」 市民モニターについては、引き続き年2回開催の意見交換会等を開催し、毎年約10名のステークホルダーより当館の様々な事業活動に対する継続的なユーザーの立場から意見を聴取するだけでなく、単年度ならびに中期3カ年の定性的な評価を得ることができた。この結果を事業評価委員会に報告するとともに、運営改善や市民サービスの向上に反映させ、成果を上げている。</p> <p>「ローリングプラン2016」から新たに取り組んでいる「ソーシャル・インクルージョン」及び2013年度から継続的に取り組んでいる「地域づくり」については、定性的な中期事業評価として、フォーカスグループインタビュー（FGI）形式による圏域市民調査を実施した。各テーマについて地域で関わりの深い圏域市民10名を構成市や市民モニターなどから推薦していただき、中期3カ年における当館の取組姿勢やその方向性を評価していただくとともに、現状の課題や今後の可能性についても検証、分析を行った。FGIを契機に、新たな連携や取り組みに活かす計画である。</p> <p>財政計画・体制整備「持続可能なしくみを」 前期の今後の課題でも触れていたように駐車場整備事業費に総額7億6千万円余りを要し、施設の老朽化対策や更新費用に充当する財源が大幅に不足している状況であったが、構成市及び組合議会のご理解をいただき、平成30年度から構成市負担金を3,100万円増額させていただくことができた。</p> <p>圏域市民の誰もが科学を楽しめる生涯学習の場として持続可能な施設運営が実現できるよう、令和6年度に大型空調設備の更新を予定した令和5年度までの新しい財政計画を平成31年4月に策定した。</p> <p>構成市負担金を増額していただいた一方、自主財源の確保策のひとつとして、当組合の指定金融機関に依頼して、当館のネーミングライツに関心のある事業者調査を実施したが、成果に結び付けるまでには至らなかった。</p>	<p>マーケティング「愛着の持てるロクトへ」 今期の市民モニター制度については、より広く圏域市民の意見が取り入れられる運営が実現できるよう、多様な年齢層や継続性を担保しつつ、構成市や科学館ボランティア会などとの連携を図りながら、モニターのリクルーティングに取り組んでいく。</p> <p>財政計画・体制整備「持続可能なしくみを」 築後25年以上経過しているため、施設の老朽化対策及びこれに充当する財源の確保は当館の喫緊の重要課題である。令和6年度の大型空調設備の更新までは、ある程度の見通しが立っているものの、その先はこれからの状況である。次期3カ年中には令和7年度以降の見通しを立てるため、修繕計画の策定を予定している。これからも持続可能な施設運営が実現できるよう必要な修繕を実施するとともに、構成市の負担を極力抑制した形での計画となるよう進めていきたい。</p>	A	A	<p>中期3カ年事業の成果に対する評価 市民モニター制度は約10名のステークホルダーより継続的なユーザーの立場から意見を聴取し、多様な立場から定性的な評価を得て、運営改善や市民サービスの向上に反映させて成果を上げている。これは「利用者の顔」を容易に推測でき、利用者の立場で科学館事業を見直すスキームとしても高く評価できる。市民モニターへのヒアリングの継続実施や、中期事業に対する定性的な評価を得るためのフォーカスグループインタビューの実施を通して、メインターゲットである圏域市民の科学館に対する評価を取得し、それを事業計画の策定に生かし、PDCAのマネジメントサイクルを機能させている点を高く評価する。また、令和元年度からの構成市負担金の増額により、持続可能な館運営のための財政計画を策定したことを評価する。</p> <p>今後の課題・今後への期待 中長期的な展示や施設の陳腐化・老朽化対策や、アクセスのさらなる改善は継続した課題として取り組まれることを望む。今後30年の科学館運営を考え、重要な知見を得るために、ジュニアボランティアOBOGなど特に10代の意見の聞き取りを行うことを期待する。</p> <p>また、フォーカスグループインタビューを契機に新たな連携が生まれることも期待する。</p>

4. 評価結果（定性評価）

	自己評価			外部評価	
	今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総括的な意見等）
H29	<p>今年度は地域を強く意識した企画や、実験的イベントが数多く実施できた。</p> <p>地域の魅力関連では、東久留米市出身のアーティスト・大小島真木氏による88星座、秋の企画展『今晚なに食べる？』、春の企画展『たまろく水辺の案内所』で地域の価値の言語化並びに市民活動の内容の発信ができた。</p> <p>さらに秋の企画展を受けて運営連絡協議会でも『食と農』を展開し、協定先の東京大学生態調和農学機構、機械振興協会、西武鉄道や、各圏域の気鋭の実験的農家との市民参画の農と食のあるべき姿のイメージ化をしつつある。</p> <p>実験的イベントとしては、IPMUによるオール英語のサイエンスカフェ、夏の企画展では、集客が心配されたが難解な数学を取り入れた『パズル展』、さらに平日大人向けの講座開催などを実施し、すべて期待以上の成果が出ている。</p>	<p>科学館という施設の性格上、科学リテラシーの育成が、地域リテラシーの向上につながっていくことが一番望ましい活動であり効果が大きい。そのことを踏まえ、多くの人が集まる場所の特性を生かした、地域の方々が世代や立場を超えて交流し、生涯学習や社会参画をする地域づくりの場となることをさらに進める。</p> <p>ソーシャル・インクルージョンをベースに、地域の課題解決やコミュニティの再生を果たすべく、科学館が地域の交流拠点（コミュニケーション・プラットフォーム）となつて、地域の人々や研究機関などの活動を支援し活性化が進むよう、地域づくりに取り組む人材の育成へとつなげていく。</p> <p>また一方で、科学館の活動を通して地域資源の発掘や価値づけ、地域資源の言語化を行い、多摩六都の魅力を広げ発信する。</p>	A+	A+	<p>年間の利用状況（24万人の来館者数）、経営状況、中期目標に対する成果、年齢別プログラムの実施と成果等、定量指標も定性指標も大きな成果を上げている。また、全英語のサイエンスカフェ、平日の大人向けの講座、パズル展などの企画展、「食と農」という新しいテーマへの取り組みなど、意欲的かつ実験的な事業を数多く実施され、それぞれに成果を上げたことは高く評価したい。さらに、新企画を試みながらもこれらの中から定番となる事業を育てていただきたい。地域とつながる新しい企画を打ちだし、量的にも質的にも着実に成果が上がっている。地域資源の発掘・価値づけは、多摩六都科学館の重要な活動のひとつとして、今後も継続して取り組んでほしい。</p> <p>「ソーシャル・インクルージョン」への取り組みは意欲的なことではあるが、慎重に進めるべき課題だと思う。地域課題というのは一般論ではなく、圏域の地域課題とは何なのかを現況把握した上で精査していくことが必要だと思う。</p>
H30	<p>この1年、行政側からのアプローチが増加傾向になって来た感がある。多摩六都科学館の企画力と発信力が認知され始めたとも考えられる。具体的には教育委員会や環境部からの依頼で連携活動が始まっている。</p> <p>プログラミング教室が実質的にスタートし、教育委員会や教育現場が2020年に向けて試行錯誤している中で、多摩六都科学館に大きな期待を寄せていると感じられる。</p> <p>昨年度実験的に開催したイベントも今年度拡大して開催しており、またサイエンスレクチャーやサイエンスカフェも内容のバリエーションを増やし、全世代に対する生涯学習施設としての価値が高まっていると考えている。</p> <p>東大大豆塾・運営連絡協議会における「農と食のプロジェクト」で市民主導の動きが見えてきたことが将来的な成果と言える。</p>	<p>科学館事業に関しては、スタッフの成長や能力の向上もあり、意欲的な新しい企画が多く生み出されており、非常に良い状況にあると言える。今後もマンネリ化を排除し、常に新しい何かに取り組む事を継続していきたい。</p> <p>地域拠点事業に関しても、圏域の多くの個人・団体とのつながりができており、協力しての事業を行ってきている。</p> <p>平成31年度の文化庁からの助成金事業「ミュージアムを中心とした地域の多文化共生プロジェクト」に採択されたこともあり、ともしれば理解しにくいソーシャル・インクルージョンを具現化し、それをもって地域の課題解決やコミュニティの再生を果たす圏域の交流拠点＝ハブ（コミュニケーション・プラットフォーム）のイメージをデザインしていきたいと考えている。</p>	A+	A+	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>年間24万人の科学館利用者数や駐車場利用台数ともに高水準を維持していること、科学館事業、地域拠点事業、マーケティングの充実など大きな成果をあげている点を高く評価する。また、重点的な業績指標（KPI）への評価が高いこと、行政側からのアプローチが増えている点は、科学館の地域資源としての評価が高まりつつある現れと言える。</p> <p>また、組合と指定管理者の関係はパートナーとして協力しながらも、情報格差が起らないように緊張感のあるガバナンスが必要であるが、この点もうまく機能していると思われる。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>ソーシャル・インクルージョンや地域のハブ化といった取り組みは、館の活動を通して地域の課題を解決することであり、短期間で成果のあがるものではなく、長期的な取り組みが必要である。引き続き、圏域の交流拠点となる努力を一層続けてほしい。</p> <p>ソーシャル・インクルージョンについては、科学館ボランティアとの協働や地域の人的ネットワークをさらに強化・拡大することによって、具現化につながる可能性が高い。今後の展開に期待したい。</p>

4. 評価結果（定性評価）

自己評価			外部評価	
今年度の取組結果・成果	課題・今後の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総括的な意見等）
<p>R1</p> <p>事業の2本柱である科学館事業と地域拠点事業はそれぞれが独立した事業ではなく、事実上マトリックス状に関連しあっている事業となっている。自然系では地域の市民グループ・東大をはじめとする教育機関と、また科学技術系では地域の企業・研究所と連携を組む等して、地域と密着した事業を展開し成果を上げている。平成29年度～令和元年度期は3月の閉館がなければ26万人は十分射程にとらえていた。地域とのつながりの拡大やソーシャル・インクルージョンに対する取り組み、さらには学校に対する支援や多様な学びの場の創出等、すべてに渡り成果が出ており、事業の基本方針は達成できていると考えている。しかし新型コロナウイルス感染症拡大で明らかになった格差・貧困に踏み込むことはできてはいない。</p> <p>ただし地域づくりへのスタッフの意識は高く、各事業をリードし、地域とつながるベクトルを示すマーケティングと運営管理も、各事業と適切な連携が取れていることが、今期の幻の記録の結果につながっていると言える。</p>	<p>新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、令和2年度は厳しい運営を余儀なくされる。</p> <p>実感を伴う理解に通じる対面型・体験型プログラムの自粛が求められ、非接触型コミュニケーションの開発が課題となり、閉館期間中（令和2年3月～6月）に取り組み始めている。展示物に関する動画を作成し、QRコードをその展示物に貼り、スタッフと利用者をつなぐ試みをホームページにアップし『おうちでロクトを楽しもう』を展開している。また6月中にはZoomによるオンライン講義やワークショップを実施し、今後への展開を試行中である。</p> <p>博物館相当施設にふさわしく、標本などの上質かつ価値あるコンテンツのデジタル化やオンライン化を進め、科学館へのアクセスを外部環境の変化に応じて多様化していくことも重要課題として認識している。</p>	<p>A+</p>	<p>A+</p>	<p>今年度事業の成果に対する評価</p> <p>自己評価の通り、新たな取り組みのすべてで成果を出し、使命ならびに活動理念に向かって着実に進んでいる点を評価する。</p> <p>また、市民モニター制度による利用者目線の意見の集約、ソーシャル・インクルージョンと地域づくりの取り組みなど多種多様な事業を展開している点も評価する。</p> <p>外部資金の導入として、文化庁の助成事業により単独では取り組みにくい事業を組合と指定管理者の両方で推進した点も評価する。</p> <p>令和元年度は、臨時閉館がなければ過去最高の利用者が見込め、その利用者増のベースに科学館事業と地域拠点事業が有機的につながり合いながら行われている点を高く評価したい。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>ネーミングライツについては成功例ばかりではないので、事例研究を進め検討してほしい。</p> <p>博物館相当施設の指定により、今後の事業活動がさらに充実するよう計画的に進めていくことを期待する。</p>

自己評価			外部評価	
中期3カ年の取組結果・成果	現状の課題・次期3カ年の取組方針	目標の達成状況	評価	総評（総括的な意見等）
<p>中期3カ年</p> <p>H29～R1</p> <p>多様な「学びの場」の創出</p> <p>『観察・実験・工作』を核にした実感を伴う多様な理解の場の提供が9万人の新規顧客の創造につながった。</p> <p>もちろん生解説の「0歳からのプラネタリウム」など、客層は多様な幅の広がりを進めている。</p> <p>「地域づくり」に貢献する</p> <p>ローリングプラン2016スタート時にスタッフで意思統一したことは、事業の2本柱である科学館事業と地域拠点事業はそれぞれが独立した事業ではなく、お互いが深くかわりあった事業となっていることであった。自然系では地域の市民グループ・東大をはじめとする教育機関と、また科学技術系では地域の企業・研究所と連携を組む等して、地域と密着し、身近な科学的現象や実感体験につなげ展開し、成果を上げている。なぜ地域づくりに取り組むのかというスタッフの疑問は解消されている。</p> <p>令和元年度は3月の閉館がなければ年間利用者数26万人に届く状況となりえたことや利用料金還元金の累計からも持続性を担保する運営を可能としている。</p> <p>地域とのつながりの拡大やソーシャル・インクルージョンに対する取り組み、さらには学校に対する支援や「多様な学びの場の創出」等、事業の基本方針は達成できていると考えている。</p> <p>昨年の9月ICOM京都のMDPPは、多摩六都科学館にとって大変意義深いものであった。基本理念「人間と科学の調和、文化としての科学、専門性とエンジョイメント、地域コミュニティーの生涯学習拠点」のための体験型プログラムによる『多様な学びの場』は実現できた。</p>	<p>ICOMやSDGsでの深刻なテーマ、格差、貧困、教育面での援助の遅れなど、新型コロナウイルス感染症拡大で明らかになった真の意味でのソーシャル・インクルージョン＝「格差・貧困の解消」に踏み込むことはできていないこともまた事実であり、今後の取り組みが地域にとっても大きな課題と考え、残り4年のテーマとして取り組んでいく。</p> <p>また、展示のデジタル化や利用者の再定義なども検討し、3密を回避できるコミュニケーション・デザインにも取り組む計画である。</p>	<p>A+</p>	<p>A+</p>	<p>中期3カ年事業の成果に対する評価</p> <p>評価結果・実績値は目標を上回る成果をあげている。</p> <p>科学館の使命である多様な「学びの場」の創出においては、「観察・実験・工作」を核にした実感を伴う多様な理解の場の提供が9万人の新規顧客増につながり、「0歳からのプラネタリウム」などの新たな事業により利用者層に多様な広がりが見えている点は大きな成果である。</p> <p>「地域づくり」に貢献するという点においては、科学館事業と地域拠点事業が有機的に関連していることをスタッフ間で意思統一して取り組み、両事業とも地域資源を活用し、それを伝えることで圏域の利用者に地域への愛着を深く植え付けている点と考えられる点を評価する。</p> <p>また、大学やNPOといった地域の資源と積極的に連携したプログラム展開やソーシャル・インクルージョンの視点を掲げて新規顧客開拓をすることにより、多くの新規利用者の獲得につながった点を高く評価する。</p> <p>今後の課題・今後への期待</p> <p>博物館相当施設としてのさらに充実した活動を計画的に推進していくことを期待する。</p> <p>3年間で培ってきた地縁・人縁をより一層活用して、多様な学びの場を設計し、年齢・国籍などを問わず多様な人々に、科学や地域のおもしろさ・楽しさを伝え、知的好奇心を刺激する取り組みを行ってほしい。</p> <p>また、自然系の分野では圏域の生物多様性の高さをアピールできる展示（企画展・常設展）を実現することで、自分たちの住む地域の自然環境の価値を再認識させ、地域の誇りとして感じてもらうとともに、環境保全への機運を高められることにもつながり、SDGsやエシカル消費など圏域の市民の行動変革も期待できると考える。</p>

本報告書2～10頁の「2. 中期の重点戦略ならびに業績指標」一覧内の「事業概要」列に記載されている番号は、「令和元年度 指定管理者事業報告書」内で、その指標に該当する事業項目を指す。詳細は「令和元年度 指定管理者事業報告書」を参照。

多摩六都科学館事業一覧

「令和元年度 指定管理者事業報告書」 目次		該当頁
I	概要	1
	1 指定管理者	1
	2 施設概要	3
	3 施設の利用状況	6
II	指定管理業務事業報告	9
	1 科学館事業	9
	1-1 調査研究・収集保存活動	9
	1-2 展示活動	11
	1-3 天文映像活動	21
	1-4 参加体験型学習活動	26
	1-5 学校連携・支援	30
	1-6 人材育成・研修活動	35
	1-7 研究機関・関連団体との連携活動	40
	2 地域拠点事業	45
	2-1 地域の交流拠点活動	45
	2-2 地域資源創造・魅力発信活動	56
	3 マーケティング	59
	3-1 顧客開発	59
	3-2 市場調査	60
	3-3 広報・PR活動	61
	4 運営管理	64
	4-1 チケット発券・利用案内	64
	4-2 安全管理業務	64
	4-3 設備管理業務	65
III	収支報告	69
	資料	72
	利用者アンケート集計結果	87

多摩六都科学館組合事業評価委員会条例

平成16年3月3日
条例第2号

(設置)

第1条 多摩六都科学館の事業評価を行うため、多摩六都科学館組合事業評価委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 委員会は、管理者の諮問に応じ、次の事項について調査し、検討し、及び答申する。

- (1) 主要な事業成果の検証について
- (2) その他管理者が必要と認める事項

(組織)

第3条 委員会は、学識経験を有する者のうちから、管理者が委嘱する委員5人以内で組織する。

(委員の任期)

第4条 委員の任期は、2年以内とする。ただし、再任を妨げない。

- 2 補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第5条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員の互選により定める。

- 2 委員長は、委員会の会務を総理する。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(招集等)

第6条 委員会は、委員長が招集する。

- 2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開くことができない。
- 3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第7条 委員長は、必要があると認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(庶務)

第8条 委員会に関する庶務は、多摩六都科学館組合事務局において処理する。

(補則)

第9条 この条例に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

この条例は、平成16年4月1日から施行する。

多摩六都科学館組合事業評価委員会委員名簿（第7期）

多摩六都科学館組合事業評価委員会条例（平成16年条例第2号）第3条の規定に基づき、5人の委員に委嘱している。

役 職	氏 名	所 属
委員長	柴田 徳思	東京大学 名誉教授
副委員長	桧森 隆一	北陸大学 副学長・教授
委員	小谷 泰弘	東久留米市在住市民（科学館ボランティア会役員）
委員	坂本 和弘	葛西臨海水族園 副園長兼飼育展示課長
委員	杉浦 幸子	武蔵野美術大学 芸術文化学科 教授

多摩六都科学館組合市民モニター設置要綱

平成 27 年6月1日
決定

(目的)

第1 多摩六都科学館組合(以下「組合」という。)における事業評価活動を推進し、市民の理解と協力を得てニーズに適った効用の高い科学館運営を図ることを目的として、市民モニターを置く。

(職務)

第2 市民モニターは、次の職務を行う。

- (1)組合の依頼する調査等に協力し、意見を述べること。
- (2)市民モニター会議、研修会等に参加すること。
- (3)その他組合の事業評価活動と広聴活動推進に関して必要な事項に協力すること。

(定数及び委嘱)

第3 市民モニターの定数は、10名以内とする。

2 選任は、原則として公募により、年齢、地域等を考慮して、組合管理者が委嘱する。

(資格要件)

第4 市民モニターは、次の要件を満たす者とする。

- (1)満 20 歳以上の組合構成市の市民であること。
- (2)組合の公職者及び組合構成市の職員でないこと。

(委嘱期間)

第5 市民モニターの委嘱期間は、1年以内とする。

(委嘱の取消し)

第6 市民モニターが、次の各号の一に該当するときは、委嘱を取り消すものとする。

- (1)第4に定める資格要件を失ったとき。
- (2)辞退を申し出たとき。
- (3)職務の遂行ができなくなったとき。
- (4)その他組合管理者が取り消す必要があると認めたととき。

(報償費)

第7 市民モニターに対しては、予算の範囲内で謝礼を支払うことができる。

(庶務)

第8 市民モニターに関する事務は、組合管理課が行う。

2 管理課長は、必要に応じて、多摩六都科学館指定管理者と次に掲げる事項を協議する。

- (1)市民モニター会議・調査の課題の決定。
- (2)その他本業務運営に関すること。

(委任)

第9 この要綱に定めるもののほか、必要な事項については組合管理者が別に定める。

附則

この要綱は、平成 27 年6月1日から施行する。

市民モニターによる評価実施の目的

多摩六都科学館組合は、市民モニターによる評価は、下記目的のために実施する。

- 事業結果や定量的な調査では測れない指標について、圏域市民の立場から定性的に評価を行う。
- 定性的な実績指標について、中期的な観点から、年度毎の評価を行う。
- 多様な立場のステークホルダーからの支援を継続していくために、変化していくニーズや価値観を把握する必要がある。そこで、市民モニターを通して圏域市民の「支援開発志向」を定点で調査できる手段としても活用し、支援体制や協力体制のあり方やニーズの把握に役立つ。

多摩六都科学館組合事業評価 市民モニター名簿

市民モニターの人選は、多摩六都科学館のステークホルダーのうち、中長期的な観点から科学館事業を定性評価できる圏域市民9名の方々に依頼を行った。

No.	住所・所在地	性別	ステークホルダー種別
1	小平市在住	女性	市民・友の会・公募
2	小平市在住	女性	市民・友の会・公募
3	清瀬市在住	男性	市民・友の会・公募
4	西東京市在住	女性	市民グループ
5	西東京市在住	女性	市民グループ
6	東久留米市在住	女性	事業協力者
7	西東京市在住	女性	学生・継続的ユーザー
8	西東京市在住	女性	市民
9	小平市在住	女性	市民

(1) 3カ年の取組状況

- 2017年度～2019年度3カ年の定性的中期事業評価を行うために、3カ年の取り組みについて概況の整理を行った。
- 「ローリングプラン2016」から新たに取り組んでいる「地域づくり」と「ソーシャル・インクルージョン」に対する取組状況を特筆して整理を行った一覧が下記となる。

2019年11月15日（2020年6月改訂）

目標 ローリングプラン2016より加わった新たな重点戦略 ならびに業績指標	中期3カ年の主な取組結果・成果		
	平成29年度：2017年度	平成30年度：2018年度	令和元年度：2019年度
地域づくり （地域のハブ機能） 「地域づくり」 多摩六都科学館は、行政枠やジャンルを超えて広域かつ総合的に、圏域市民が主体的に係わり、地域の課題を解決していくために貢献できる科学館をめざしている。 「ハブ」 科学館が車輪の軸ようになって、周囲のコミュニティーを相互に結びつける機能を表し、地域のさまざまな主体・組織の人的交流や情報の結節点となる場所、あるいはさまざまなネットワークの拠点施設のひとつとなることを指す。	I ①秋の企画展示（食とからだをテーマ）：地域の農家と連携 ②春の企画展示（構成5市を流れる川をテーマ）：自然保護市民団体と協力（平成30年度に継続） ③プラネタリウム番組（東久留米市出身アーティストに全88のオリジナル星座絵を依頼し、番組を作成）	I ①春の企画展示（構成5市を流れる川をテーマ）：自然保護市民団体と協力（平成29年度より継続） ②夏の企画展示（駅からみえるまち・ひと・技術）：地域の発展とそこに住む人々を紹介 ③春の企画展示（文房具展）：圏域にある大学との連携（武蔵野美術大学）	I ①春の企画展示（文房具展）：圏域にある大学との連携（武蔵野美術大学） ②秋の企画展示（つむぐ展） ③ミニ企画展示「科学の本棚」 ④多摩北部広域こども体験塾：各企画展示等において市民と連携協力して実施
	III 『北多摩の農と食』をテーマに運営連絡協議会を再編成し、北多摩の農と食の魅力の発信方法等について検討を始めた。	II 市民感謝ウィークの実施 III ①圏域企業、行政や商工会との連携が各事業や市民感謝ウィーク等で進みつつある。 ②農と食の体験塾（5年目）が、市民の主導により進められている。（東大生態調和農学機構） ③圏域の地に足がついた運営連絡協議会となり、継続的に参加者相互で協議会を育てている。	II 圏域市ウィークの実施 III 圏域市ウィークにおいて、各市の食と農の体験会やお話を実施。特産市やミュージアムショップの委託販売においても関係づくりと魅力発信を進めている。
ソーシャル・インクルージョン （社会包含・包摂/social inclusion） 2000年の「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」（厚生労働省）の報告書において、従来の伝統的な貧困や障がいの枠組みによる社会福祉のとらえ方では不十分であることが指摘された。 すべての人が地域において、健康で文化的な自立した生活を送るために、誰もが排除されない・差別されない社会の実現を目標としているソーシャル・インクルージョンが新たな福祉課題に対応するための理念として位置づけられ、共に生き・支え合う社会づくりが重要視されている。	I ①大人向け平日講座を試行的に実施（地球科学入門） ②シニアキャンペーンに替わる新たなキャンペーンとして大人のカフェ&シアターを企画 ③おもいやりプラネタリウム・大型映像の実施	I ①大人向け平日講座のプログラム拡大、カブラプログラムの実施→シニアの生涯学習機会の提供 ②プログラムの多様化→子ども向け、赤ちゃん向け、障がい者向けなど	I ①「0歳からのプラネタリウム」、大人向けプラネタリウムを圏域市ウィークに合わせて実施 ②おもいやりプラネタリウム・大型映像チラシをフルカラーにリニューアル
	II 圏域市の小学校の全校利用等を目指し、学習利用の手引きを分かりやすくかつ利用意欲が高まる内容にリニューアル	II 学習利用の手引き22ページの予約制プログラムに、実験「プログラミングを体験しよう」を掲載。学校での学びに深くかかわれる利用手法を開発している。	II 出張プログラムの開始（来館が難しい地域や学年に対するアプローチ）
		III 文化庁助成事業への申請 「ミュージアムを中心とした多文化共生プロジェクト」	III 文化庁助成事業採択 「ミュージアムを中心とした多文化共生プロジェクト」の事業実施（別途報告書参照）
		IV ①科学館ホームページ等における多言語化対応 ②科学館パンフレットなどにユニバーサルデザインフォント（UDフォント）を採用 ③やさしい日本語×かがくかんワークショップの開催（絵本づくり、春の企画展ガイドツアー）	IV ①スタッフ向けやさしい日本語研修会を実施（展示解説やお知らせ、実施事業に活用） ②やさしい日本語ウェブサイトの作成 ③韓国語・中国語パンフレットの作成
特記事項	友の会の年間パスポート機能とメンバーシップ機能を分離 年間パスポート購入数は従前の3倍以上（3分の2が圏域市民利用）		
		プログラミング教育への寄与（平成29年度末に機材を購入）プログラミング関連教室が本格的にスタート（教師向け、大人向け、子ども向け） 圏域に住む外国人向けにやさしい日本語に向けた取り組み（上記の参照）	継続

(2) 調査の目的

- 多摩六都科学館第2次基本計画（2014年度～2023年度）の改定（以下「ローリングプラン2016」という。）に伴い、2017年度～2019年度3か年の定性的中期事業評価のための圏域市民調査を行い、圏域市民の目線に立った科学館利用を促す手法を検討。
- 「ローリングプラン2016」から新たに取り組んでいる「地域づくり」と「ソーシャル・インクルージョン」に対する取組姿勢やその方向性を評価し、現状の課題や今後の可能性についても検証・分析。
- 新たな取り組みに対する定性評価のあり方や次期ローリングプランならびに第3次基本計画（2024年度～2033年度）の策定にかかる課題の抽出。

(3) 調査方法

市民対象

●フォーカスグループインタビュー

圏域市民から10名（30代～70代）を選し、フォーカスグループインタビューの形態をとり、定性的評価を実施。5市企画課や市民モニター、科学館ボランティアからの推薦があった地域で実際に活動に従事している方々に依頼。

●開催日時ならびに開催場所

2019年11月22日（金）10：00～12：30 多摩六都科学館 201会議室
2019年11月28日（木）14：00～16：30 同上

事業実施者対象

●WEBアンケート

事業を実際に運営している指定管理者のリーダー等7名を対象に中期の事業評価を実施。市民の評価結果と比較分析するデータとして活用するために実施。

(4) 調査結果

市民対象

●フォーカスグループインタビュー結果

多摩六都科学館の「地域づくり」と「ソーシャル・インクルージョン」の3年間の定性的段階評価の結果は、右表の通り。

市民と事業実施者の結果比較

両者の段階評価を比較した結果が下表となる。「地域づくり」に関しては、市民と事業実施者との段階評価に大きな違いがないことがわかる。「ソーシャル・インクルージョン」に関しても、市民の評価が高いが、コメントを見ると、成果ではなく取組姿勢を評価していることがわかる。実際の成果に関する段階評価は、事業実施者の評価が現実に近いものと思われる。

定性的中期事業評価の総評結果

これらの結果から、この3か年の「地域づくり」の達成度の総評はA+に近いA、「ソーシャル・インクルージョン」の達成度の総評はAに近いBとすることとする。

①地域づくり

調査対象	A++	A+	A	B	C	計	加重平均
市民	0	5	4	0	0	9	3.56
事業実施者	1	1	5	0	0	7	3.43

②ソーシャル・インクルージョン

調査対象	A++	A+	A	B	C	計	加重平均
市民	0	4	4	1	0	9	3.33
事業実施者	0	0	2	5	0	7	2.29

① 地域づくりに関する中期的事業評価結果一覧

活動領域の判別 地域：地域づくり S.I.：ソーシャル・インクルージョン

構成市	No.	地域	S.I.	段階評価	コメント
小平市	1		●	A+	モチベーションを上げるという意味でA+。評価の結果が今後の活動にどのように反映されるかを期待している。
	2	●		A+	いろいろな方面で頑張りがあると思うが、まだまだできることもたくさんありそうな気がする。事業を拡げていくためにはどことつながると情報があるのか、という面で協力ができそうだ。
東村山市	3	●			欠席
	4	●		A	地域づくりについては、あまりよくわからないところもある。
清瀬市	5	●	●	A	Aに近いA。計画に即して目標達成しているかという点、達成していない。ただし内容の改善は必要ない。地域づくりは時間がかかるものだと思う。
	6	●	●	A+	高校生になるとロクトニュースや科学館にまつわる情報が途切れてしまうことが寂しい。抽選企画の枠を増やしてほしい。
東久留米市	7	●		A	行政枠、産学を超えたつながりは感じる。各自治体の結びつきは読みきれない。
	8	●	●	A	印象に残るのは「圏域ウィーク」。FBやTwitterのSNSを通じて情報を得ているという点。他のものは自分から情報をとりに行かないと、興味を持って意識して探さないとけない。大小島真木さんの参画も東久留米市では話題になっていたが、東久留米市民がどれだけ足を運んだらうか。さほどでないと思うと少しもったいない。
西東京市	9	●	●	A+	地域づくりを主な目標に掲げているのは素晴らしい。いろいろな方向に目を向けて活動している。高齢の方、情報の届きにくい方に向けても地域づくりという視点で発信して取り込んでほしい。そういう方々にとってもここが、カルチャーの場・ワクワクする場になっていけるよう、活動してほしい。公民館にポスターは掲示されるが、もう一歩何か仕掛けを作してほしい。
	10	●	●	A+	資料を通して工夫した取り組みを行っていることがわかった。実際に孫と一緒に参加させてもらい、孫の様子も見て実感できたのでA+。
総評				A+	

② ソーシャル・インクルージョンに関する中期的事業評価結果一覧

構成市	No.	地域	S.I.	段階評価	コメント
小平市	1		●	A	まだまだ達成していない。
	2	●		A	多岐にわたることなので、まだまだ道半ばと感じる。
東村山市	3	●			欠席
	4	●		A+	成果の具体的な項目がないので評価しにくいだが、感覚的に「こういうことをやっているのか」と理解はできる。
清瀬市	5	●	●	A+	0歳児からのブラネタリウムの話からも、成果を上げていると思う。
	6	●	●	A	実際に0歳児を連れてくると大変だった。子どもの個性で楽しめない企画もある。子どもがビリビリした状態なのはつらい。遠巻きな距離で見守れるスペースがほしい。大きい子ども（高校生）が行くと目立つ。そういう子どももいつでも行ける状態だと嬉しい。全世代という点で改良の点を感じる。
東久留米市	7	●		A+	今すぐに、単年度や2～3年で出る結果ではない。成果というより、チャレンジ度を評価。先々への種まきの時期にあたる。今後に期待している。
	8	●	●	B	期待を込めて。ソーシャル・インクルージョンは多岐にわたる。まちづくりと同じで終わりが無い。多文化共生では弊害がある。この先、発達障がいのお子さんやディスレシア等感覚障がいの人たちに向けたチラシ作り、サイン整備など、継続的に取り組んでいただきたい。東久留米市の発達支援サークルは、研究熱心で子どもの特殊性を理解した道具の企画が素晴らしい。本当に必要な人のところに届くように取り組んでいただきたい。
西東京市	9	●	●	A	これからの可能性。どの辺にターゲットをおいて事業を組み立てていくか明確にすることと、みんなを包んでしまうというくりの明確化。障がいのある方が楽しめるプログラム、意味合いをはっきり出してもらえると、参加する方もわかりやすい。
	10	●	●	A+	「0歳児からのブラネタリウム」は、当初年齢的にどうかと思ったが、親が子どもに興味を与えるという意味では、全体的には良いかと思う。
総評				A	